

9. 平城京跡（左京三条五坊六坪）の調査 第498次

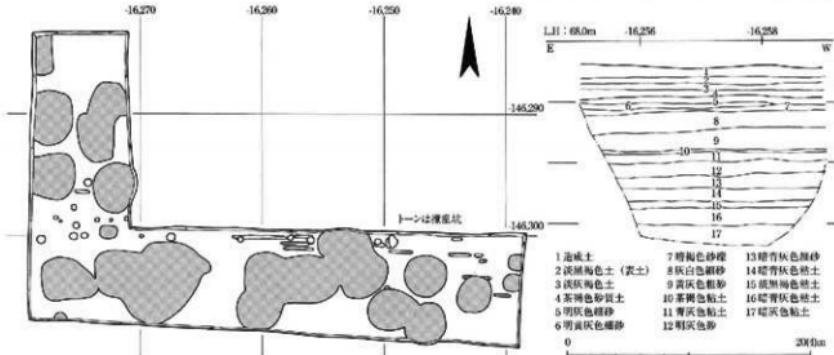
調査次数	HJ 第498次	調査期間	平成15年6月26日～7月9日
工事内容	共同住宅建設	調査面積	464m ²
届出者名	株式会社森下組	調査担当者	中島和彦
調査地	奈良市大宮町1丁目38-1番地他		



第498次調査 発掘区位置図 1/6,000



第498次調査 発掘区全景（南西から）



第498次調査 遺構平面図 1/400、発掘区南壁土質図 1/80

10. 平城京跡（左京三条三坊十一坪）の調査 第499次

調査次数	HJ 第499次	調査期間	平成15年7月1日～9月2日
工事内容	事務所・店舗新築	調査面積	239.5m ²
届出者名	株式会社清水建設	調査担当者	三好美穂
調査地	奈良市大宮町4丁目281番地		



第499次調査 発掘区位置図 1/6,000

I. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると、左京三条三坊十一坪の北半中央部に相当する。十一坪内の発掘調査は、これまでに2回実施されており、奈良時代の大規模な建物を初め土坑や溝が検出されている。隣接する十四坪では、奈良時代の遺構の他に、弥生時代の流路や遺物や遺構も発見されている。

今回の調査は、十一坪内の宅地の利用状況を追認するとともに、奈良時代の運河である東堀河の存在を確認することにも着眼点をおいた。

東堀河は、これまでに9回発掘調査が実施されており、北は少なくとも左京四条三坊十坪から南は左京九条三坊の南約50mの平城京外まで南北に貫流することが判明している。この東堀河が四条三坊十坪以北にも南北に流れていたと仮定すると、その位置は今回の調査地内の西半部に想定できることになる。調査は、このことを考慮し、北発掘区と南発掘区の2箇所に分けて実施した。

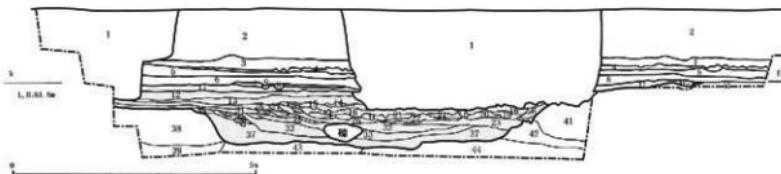
II. 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、約1.0mの盛土以下、黒色土（旧耕土）・淡灰色粘砂（床土）が約0.3m、江戸時代の土器を含む暗灰色粘土及び暗灰色砂質土が約0.3～0.4m堆積し、地表から約1.5mで奈良時代の遺構面である黄褐色粘砂となる。黄褐色粘砂上面の標高は、北発掘区で61.8m、南発掘区で61.7mである。

南発掘区の北東隅では、奈良時代の遺構面が黄褐色粘砂から黒褐色粘砂に変化している箇所も認められた。黒褐色粘砂は、時期不明の土器片を僅かに包含している。

III. 検出遺構

検出した主な遺構には、奈良時代の掘立柱建物2棟、塀2条、土坑2、溝1条、東堀河、護岸杭列、時期不明の素掘り溝1条等がある。掘立柱建物SB01・02と塀SA04・05は南発掘区で検出した。



1	塀	11	灰褐色粘土	22	暗灰色シルト	33	灰褐色中粒砂	38	淡灰色細砂
2	盛土	12	淡褐色粘土	23	淡褐色粘土+灰褐色土	34	淡黄色沙粒砂	39	灰褐色
3	砂土	13	褐色粘土	24	暗褐色粘土	35	灰褐色シルト	40	黃褐色細砂
4	土	14	褐色粘土	25	褐色粘砂	36	灰褐色中粒砂+淡灰色細砂	41	黑褐色粘土
5	暗灰色粘土	15	黒褐色粘土+灰褐色細砂	26	暗褐色シルト+灰褐色土	37	灰褐色細砂	42	青灰褐色シルト
6	暗灰色砂質土	16	黒褐色粘土	27	淡黑色シルト+淡褐色砂	38	灰褐色細砂	43	黑褐色細砂
7	灰褐色砂質土	17	暗褐色粘土+淡灰褐色砂	28	暗褐色シルト+黃褐色砂	39	灰褐色細砂	44	深灰色シルト
8	灰褐色	18	暗褐色粘土+灰褐色砂	29	淡黑色沙粒砂+灰褐色砂	40	灰褐色細砂		
9	灰褐色	19	暗褐色粘土+灰褐色砂	30	淡黑色沙粒砂+灰褐色砂 (固くしまる)	41	灰褐色細砂		
10	褐色砂	20	暗褐色粘土+淡灰褐色砂	31	暗褐色粘土	42	青灰褐色シルト		
11	暗褐色粘砂	21	暗褐色粘砂	32	灰褐色砂	43	黑褐色細砂		

第499次調査 南発掘区北壁土層図 1/100

SB01は、建物南西隅の東西1間分(1.8m)、南北1間分(2.0m)を検出した。発掘区外へ続くため建物規模や方向は不明である。SB02は、建物北西隅の南北1間分(2.0m)を検出した。発掘区外へ続くため規模や方向は不明である。

SA03・04は、東堀河の東岸から東へ約1.0mの位置で検出した。いずれも南北1間分(1.8m)の塙である。塙とするよりも橋のような構築物であったかもしれない。

東堀河SD05は北発掘区と南発掘区で検出した。

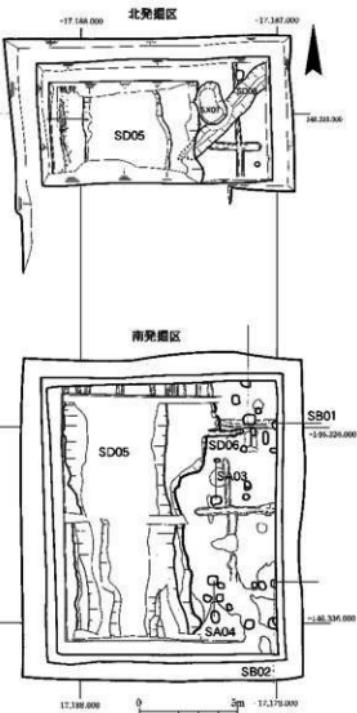
SD05は、素掘りの南北溝で、東岸から幅12.2m分を確認したが、西岸は発掘区外に続くため正確な幅員は明らかでない。溝底は2段掘りになっており、北発掘区と南発掘区北端では東岸から約2.0~3.2m分の幅でテラス状を呈し、以下ながらかに河底にいたる。河底の一部は侵食されてはいるがほぼ平らで、北発掘区での下底部の上幅は4.45m、下幅は3.9mある。下底部の西脇から1.6m以上の幅で再びテラス状の底になっている。最深部は、検出面から約1.4m(標高: 北発掘区60.5m、南発掘区60.3m)を測る。

東堀河内の堆積土層は、大きく4層に大別することができ、下から順に灰色粗砂(最下層)、灰色砂礫(下層)、黒灰色系の粘土(中層)、黄灰色系の粘土や灰色砂質土(上層)となる。

溝底に最下層(厚さ約0.3m)が堆積した時期に、当初の溝幅を少なくとも2m前後狭め、護岸を行っていた。護岸は、東堀河SD05の西岸に沿って木杭を南北に1列打ち込み(14本分を確認)、杭の西側を木枝の束と黒色粘土を使って養生していた。しかし、護岸工事をしたにもかかわらず、灰色粗砂(下層)が堆積するした頃には再び溝幅が広がり、杭列が埋没する。最下層も下層も明らかに流水堆積によるものであり、当時の東堀河の水流がかなり激しい時期があったことがわかる。中層(黒灰色系の粘土層)が堆積する頃になると、下層のような水流は認められず淀んだような状態になっており、溝幅も5.1m程に縮小し、深さも1.0mと浅くなる。この頃の東堀河は、悪臭が漂う汚い河になっていた可能性がある。

中層の上部には黄褐色粘土と灰色砂質土(上層)が堆積しており、東堀河廃絶時に埋められた層と考えられる。

東堀河内の堆積土から多量の遺物が出土したが、大半が下層の灰色砂礫のものである。遺物整理が途中であるため詳細な時期は不明だが、奈良時代を中心、平安時代、弥生時代や古墳時代の遺物も含まれていた。これまでの東堀河の調査成果から、堀河の機能が失われていくのが概ね9世紀前半頃と考えられているが、今回検出した東堀河の下層から9世紀後半~10世紀初頭に位置づ



第499次検出遺物平面図 1/250

けられる土師器が出土している。東堀河の存続時期を明らかにする手がかりとなろう。

SD06は素掘りの東西溝で、宅地から東堀河へ排水するためのものと考えられる。全長2.0m、幅0.3m。検出面からの深さは、東端で0.1m(標高: 61.7m)、西端で0.4m(標高: 61.4m)。溝内には、黄褐色粘砂が堆積していた。

SX07は、北発掘区で検出した東西1.3m、南北2.2m、平面椿円形状の性格不明の遺構である。東堀河SD05・溝SD08と重複して検出しており、重複関係からSD05・SD08よりも時期的に新しいことがわかる。遺構内には土器片を包含する黄灰色砂質土が堆積していた。

SD08は、長さ6.4m以上、幅0.2mの斜行溝。検出面からの深さは0.6mある。溝底には厚さ0.1mの黒灰色粘土が、上層には灰色系の粘土と砂の互層になって堆積している。堆積状態からみてSD08内を水が流れていったと考えられ、排水等の施設として利用されたものと考えられる。時期は不明であるが、重複関係から東堀河SD05よりも古いことがわかる。

IV. 出土遺物

今回の発掘調査で、遺物整理箱で78箱分の遺物が出土した。遺物の内訳は、弥生土器、7世紀後半の（須恵器）、8～9世紀後半の土器（土師器・須恵器・黒色土器A類・人面墨書き土器・墨書き土器・白磁）、土製品（土馬）、瓦（丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦）、磚、木簡、木製品（人形・畜串・棒状木製品・曲げ物底板等）、錢貨（和銅開珎、神功開珎）、金属製品（帶金具・刀子・釘）、サヌカイト片、17～18世紀の土器（土師器）、陶磁器である。大半が東堀河SD05から出土した。

V. まとめ

今回の発掘調査で、東堀河が少なくとも左京三条三坊十一坪から南に貫流していたことを確認できた。さらに、東堀河の北限は、本調査地よりも北に位置し、奈良時代には左京二条大路付近を西流していたと推定される佐保川であった可能性がかなり高まってきたと考えられる。

また、東堀河SD05の東岸から約2.0m以上の距離をあけて建物（SB01・02）が構築されていたことも注目すべき点である。過去に実施した東堀河の調査例（HJ第52次・HJ第284次・HJ第314次調査）では、東堀河の東岸に沿って約3.0～6.0m幅の空間地があることが判明しており、この空間地は、一種の道路として使われていた可能性が高いと考えられている。

東堀河の河底は、若干の凹凸こそあれほどとんどが平坦であるため、高瀬舟（底が浅いたいらな川舟）のような構造の舟で京内へ物資を運搬したことが想定できる。水流が弱い時などは、河の両岸から人力で舟を引かざるえないことや物資を搬送するために道路は必要であったと推察できる。

今回の調査で確認した東堀河SD05の東岸から建物までの約2.0mの空間地は、南北道路の可能性があるかもしれない。

（三好美穂）



第499次調査 北発掘区全景（南から）



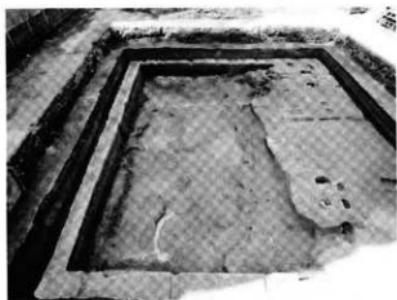
北発掘区北壁断面（南から）



SD05 西岸杭列（東から）



南発掘区東堀河の東側空間地（南から）



第499次調査 南発掘区全景（南から）

11. 杏遺跡・平城京跡（左京八条二坊二坪）の調査 第500次

調査次数	H J 第500次	調査期間	平成15年8月4日～8月19日
事業名	第11号(杏中)市営住宅建替事業	調査面積	40m ²
通知者名	奈良市長	調査担当者	秋山成人 久保清子
調査地	奈良市杏町404番地		



調査地は、平城京条坊復原によると、平城京左京八条二坊二坪の西半中央に位置する。周辺の調査では、今回の調査地の東と南に隣接して平成7年度に第11号（杏中）市営住宅建替事業に伴う発掘調査（市HJ 第337・340次調査）が行われ、弥生時代の溝・土坑、古墳3基、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物、掘立柱列、井戸、土坑を検出している。以上のことから、遺跡の広がりとその様相を明らかにするため調査を行った。

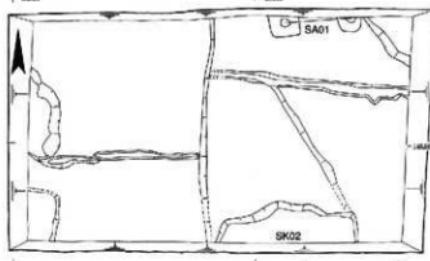
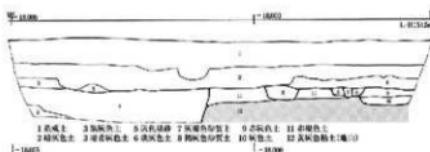
発掘区の基本的な層序は、上から造成土、暗灰色土、黒灰色土（耕作土）、灰色土、淡灰色土、赤褐色土と続き、現地表下0.8mで黄灰色粘土の地山に至る。遺構は、発掘区東半において、赤褐色土上面で奈良時代の遺構、黄灰色粘土上面で弥生時代の遺構を検出した。遺構突出面の標高は、赤褐色土上面で53.5m、黄灰色粘土上面で53.4mである。発掘区西半では、黒灰色土（耕作土）下で、落ち込みが見られ発掘区外西へ広がる暗青褐色土が0.6m以上堆積する。遺物は出土せず、時期不明。

検出遺構には、弥生時代の土坑、奈良時代の掘立柱列がある。SA01は、発掘区北壁沿いで検出した東西1間以上の掘立柱列で、柱間寸法は、1.35mである。

柱洞形から奈良時代の土師器壺・甕の小片が出上した

SK02は、発掘区南壁沿いで検出した発掘区外南へ広がる平面不整形掘形の土坑である。規模は、東西2.7m、南北0.9m以上、深さ0.4m。埋土は褐色土で、弥生土器（甕又は甕の底部）が出土した。

第500次調査 発掘区全景（西から）



12. 平城京跡（左京九条三坊八坪）の調査 第501次

調査次数	HJ 第501次
事業名	(仮称)辰市地域ふれあい会館建設事業
通知者名	奈良市長
調査地	奈良市西九条町二丁目2番地の44

調査期間 平成15年9月1日～9月24日
 調査面積 120m²
 調査担当者 立石堅志



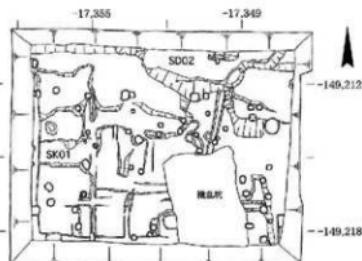
当該地は、左京九条三坊八坪の北西隅にあたり、調査地の北に八条大路が想定される。当該地の現況は駐車場であるが、昭和46年に調査地北東の現在地に移転するまで、奈良市辰市小学校の校地であった。八条大路想定地である調査地北の県道拡幅に際して、平成11年に奈良県教育委員会が発掘調査を実施しているが、この際には八条大路の遺構は検出されていない。中世の大きな流路を確認し、八条大路の側溝を踏襲した流路であろうと推察している。また、今回の調査地から東に約240m離れた、八条大路想定地南側にあたる地点で、昭和60年に市HJ第104次調査を実施しており、この際に東西方向に流れの流路を検出した。調査時には自然河川としているが、これも同様の遺構であると考えられる。



第501次調査 発掘区北壁土層図 1/80

調査は、敷地の北西に南北10m、東西12m（発掘面積120m²）の発掘区を設定して実施した。発掘区の中央には校舎解体時に基礎部材を廃棄した壊乱坑があり、この部分の遺構は破壊されていた。発掘区内の土層堆積状態は、現況地表面から約1mは造成土で、以下旧耕土、灰茶色砂質土、遺物包含層である茶灰色砂質土と続き、地表下約1.2mで遺構面である茶灰色砂もしくは灰色砂となる。遺構は基本的にこの砂の上面（標高約55.1m）で検出した。検出遺構には素掘り溝、柱穴、土坑がある。柱穴はいずれも一辺0.2～0.3mの小穴で、埋土からは12～13世紀の土器片が出土。掘形内には礎石置くものもあるが、建物としてまとまらない。SK01は、東西2m以上、南北1.3mの隅丸方形の土坑。検出面からの深さは0.2m。埋土の茶灰色粘質土から8世紀の土師器・須恵器が出土。SD02は、東西方向の素掘り溝、溝南肩を検出。浸食により深くえぐれ、南にやや広がる箇所がある。埋土は茶褐色砂質土を主とするが、浸食により広がる部分には、下層に茶灰色砂質土及び灰色砂が堆積する。茶褐色砂質土からは13世紀初頭頃の瓦器、土師器が出土。下層に堆積する灰色砂からは12世紀前半の瓦器、土師器が出土。下層遺構の存否を確認するため、発掘区西壁に沿って断削をおこなった。遺構面の下は、黄灰色粘土、黒褐色粘土、黒褐色粘土と続き、遺構面から約0.5m程度で灰色細砂となる。以下は砂と粘土の互層が続き、湧水が著しくなる。出土遺物はない。

（立石堅志）



第501次調査 遺構平面図 1/200

13. 油坂遺跡・平城京跡（東四坊大路）の調査 第502次

調査次数	H J 第502次	調査期間	平成15年9月10日～12月9日
事業名	芝辻大森線街路整備補助事業	調査面積	585m ²
通知者名	奈良市長	調査担当者	久保清子
調査地	奈良市大宮町二丁目125-7他		



第502次調査 発掘区位置図 (1/6,000)

I. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では三条条間路と三条条間南小路間に該当する東四坊大路であり、調査地の西端で同西側溝が想定される場所にある。また、付近一帯においては、古墳時代以前の遺構が確認されており、今回の調査地東側の、平成7年度の奈良県教育委員会による調査¹⁾では、縄文時代の土坑と時期不明の流路及び堅穴住居、市HJ第422次調査²⁾では、弥生時代後期～古墳時代初頭の流路を検出した。調査地の南側の、市HJ第54³⁾・461・465・479⁴⁾次調査でも弥生時代後期～古墳時代初頭の流路の他、市HJ第461・479次調査の下層遺構面において縄文時代の土坑を検出している。今回これらの調査成果を基に、条坊遺構並びに奈良時代以前の遺構を確認する目的で、市HJ第410次調査⁵⁾の北側と

南側の2箇所に発掘区を設定し、さらに北発掘区は作業の都合上3回に分けて発掘区を設定し、調査を実施した。

基本的な層序は北発掘区では、上から造成土0.3～1.3m、耕土である灰色砂質土、灰褐色砂質土0.1～0.3mと続き、黄灰色粘土もしくは茶灰色砂質土の地山に達する。

南発掘区では、上から造成土0.1～0.6m、旧表土0.1m、耕土である灰色粘土、灰色砂質土0.1～0.2m、奈良時代の遺物を包含する黄灰色粘土0.1～0.15mと続き、茶褐色粘土の地山に達する。調査地の旧地形は、北から南に向かって緩やかに下っており、地山の標高は北発掘区北端で654m、南端で652m、南発掘区645mである。

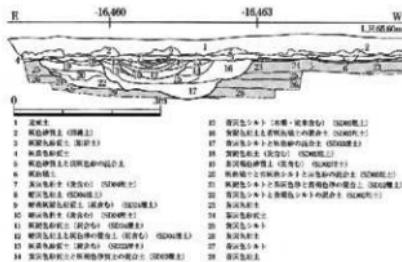
遺構は、奈良時代の整地土である黄灰色粘土もしくは地山上面で検出した。ただし、奈良時代以前の遺構については、本来の遺構面である黄灰色粘土、茶褐色粘土または茶灰色砂質土上面では、明確に検出することが困難であったため、遺構面を若干掘り下げて検出を行った。

なお、旧建物の基礎があった北発掘区北東部と中央部は遺構面が破壊されている部分がある。

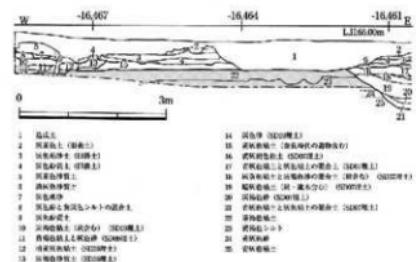
II. 検出遺構

古墳時代以前の遺構 溝5条、土坑1基がある。

S D01は幅1.3m～1.8m、検出面からの深さ0.3mの東西方向の溝で、重複関係からS D03・04、東四坊大路S F08、同西側溝S D09よりも古い。出土遺物がないため時期は不明である。S D02～04は南東から北西方に向かって流れている。S D02は幅1.8m以上、検出面からの深さ0.6mで、重複関係からS D03・04・S F08よ



第502次調査 北発掘区南壁上層図 1/100



第502次調査 南発掘区北壁上層図 1/100

りも古い。埋土中から縄文時代中期末（北白川C式）頃と考えられる土器の破片が少量出土した。SD03は幅2.3m以上、検出面からの深さ0.8mの溝で、重複関係からSD04・08よりも古くSD01よりも新しい。出土遺物はない。SD04は幅1.5~1.8m、検出面からの深さ0.4~0.5mの溝で重複関係からSF08よりも古くSD01・02・03よりも新しい。埋土中から弥生時代後半～古墳時代初頭の土器、古墳時代前半の土師器、サスカイト製の楔形石器が出土した。SD05は幅4.6~10m以上、検出面からの深さ0.3~0.5mの東西方向の溝である。重複関係から、SF08・SD09よりも古い。埋土中からは縄文土器の可能性がある土器が少量出土した。SK06は東西0.6m以上、南北2.0m、検出面からの深さ0.6mで平面が円形になるとされる土坑である。出土遺物はなく、時期は不明であるが、埋土が古墳時代以前の遺構のもの

と似ていることから、奈良時代よりも古いものと考えられる。SD07は幅2.0m以上、検出面からの深さ1.0m、南東から北西方向に向かって流れる溝で、今回溝の西肩部分を検出した。埋土中からは弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が出土した。

なお、当時の調査地周辺の環境を調べるために、SD07埋土中に含まれる花粉の分析を行った結果、周囲にはイネ科、ヨモギ属等が生育する日当たりの良いやや乾燥した環境で、溝内にはガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、イボクサ、タデ属サナエタデ節（ミゾソバ）、キンボウゲ属、セリ亞科、イネ科等の水生植物が生育していたことが判明した。また、周囲には、カシ類、シイ類を主とする照葉樹林の他、スギ、ヒノキ科等の針葉樹やナラ類、ムクノキ、クリ等の落葉広葉樹が分布していたことがわかった。

奈良時代の遺構 東四坊大路及び西側溝がある。



第502次調査 北発掘区南半部（北から）



第502次調査 北発掘区中央部（南から）



第502次調査 北発掘区北半部（北から）



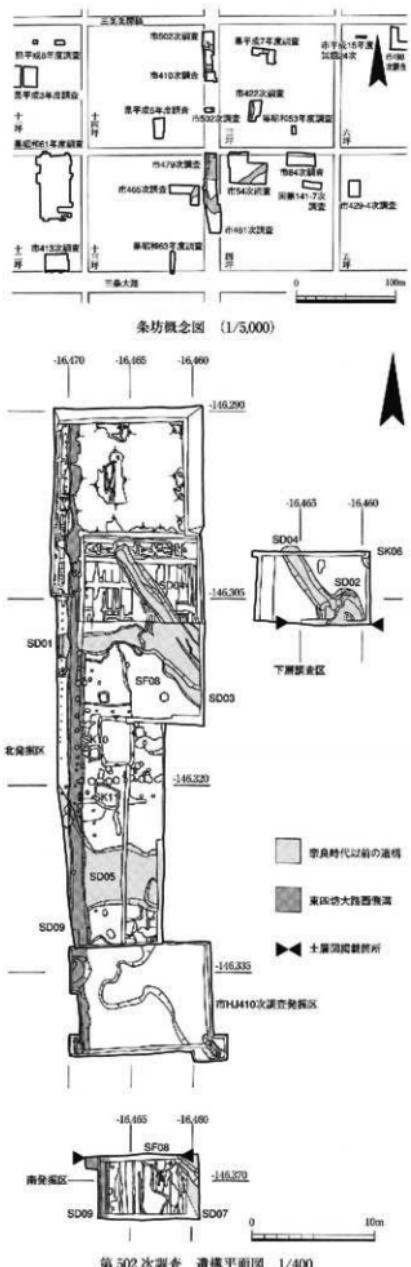
第502次調査 北発掘区下層の造構面（北から）



第502次調査 南発掘区全景（北から）



第502次調査 南発掘区下層の造構面（北から）



東西坊大路 S-F08は西側溝東肩から9.8 m分を検出した。東側溝は発掘区外に位置する。ちなみに四条地点での大路の幅員は側溝心々間で16.05m（市HJ第377-1次調査）⁵⁾である。南発掘区においては、路面の整地上を確認した。北発掘区においては、後世に削平をうけているため、整地の有無は確認できなかった。西側溝 SD09は、北発掘区においては、幅1.8m、検出面からの深さ0.2mで、溝心はX = -146.31635、Y = -16468.30である。この数値は、市HJ第377-1次調査で検出した西側溝心（X = -146.82750、Y = -16.46550）に朱雀大路の国土方眼方位に対する振れ（N 0° 15' 41"W）を考慮して換算した数値（X = -146.31635、Y = -16467.832）よりも西に0.468m位置することになる。なお、市HJ第377-1次調査検出の溝心と今回検出の溝心との振れは、国土方眼方位に対して N 0° 18' 50"Wとなる。南発掘区においては、幅1.8m以上、検出面からの深さ0.3mで、西肩は発掘区外に位置するため、溝心の位置を得ることができなかった。埋土中から弥生時代後半～古墳時代初頭の上器、奈良時代後半～平安時代初頭の土師器、須恵器、黒色上器A類、製塙土器、灰釉陶器、土馬、輪、奈良時代の型式不明の軒平瓦、丸・半瓦が遺物整理箱で2箱分出土した。なお、須恵器の中には、杯Bの体部外面に鏽が付くものや杯もしくは皿の蓋で頂部内面に墨書きがあるもの、転用硯として使用しているものがある。

室町時代の遺構 土塹2基がある。

S K10は東西1.0m、南北1.3m、検出面からの深さ0.4mの平面が隅丸長方形の土坑である。S K11は東西2.0m、南北1.8m、検出面からの深さ0.3mの土坑である。埋土中からは、奈良後半～平安時代初頭の土師器、須恵器、黒色土器A類、平安時代前半頃の灰釉陶器、綠釉陶器、平安時代以降の巴紋軒丸瓦、15～16世紀の土師器、瓦質土器、国産陶器、砥石が少量出土した。調査地周辺では平安時代以降に粘土探掘が行われていることから、これらの土坑も粘土探掘坑の可能性が考えられる。

今回の調査地でも、平城京に関する遺構だけでなく、周辺での調査例同様、奈良時代以前の遺構を確認した。特に、弥生時代後期～古墳時代初頭の溝については、近隣の調査で見つかっている同時期の流路と一連の遺構になる可能性が考えられる。(久保達子)

(久保清子)

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所「左京三条五坊三坪の調査」[奈良県道跡調査報告(第一分冊) 1995年度] 1996
 - 2) 奈良市教委員会「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成10年度」
1999 「奈良市埋蔵文化財調査報告書平成8年度」1984・「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成13年度」2004
 - 3) 奈良市教委員会「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書(第一分冊) 平成9年度」1998

14. 平城京跡（右京二条二坊九・十六坪）の調査 第503次

調査次数	HJ 第503次
工事内容	共同住宅建設
届出者名	中道不動産株式会社
調査地	奈良市西大寺国見町一丁目2137-51

調査期間 平成15年9月16日～10月28日
調査面積 400m²
調査担当者 池田裕英



第503次調査 発掘区位置図 1/6,000

I. はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では、右京二条二坊九・十六坪にあたり、発掘区の西半部に西二坊坊間小路が通ることが想定される場所である。

この小路は、西隆寺の南門から続く道路であるが、これまでの西隆寺跡の調査や¹⁾ 右京一条二坊十四坪で奈良市教育委員会が行った調査（市平城京第207次調査）²⁾により、右京一条二坊では西二坊坊間小路心が条坊計画線よりも2.5m（約20尺）西に施工されていることが明らかになっている。また、平成14年度には本調査地の北約30mの場所（右京一条二坊一条南大路）で奈良市教育委員会が発掘調査を行っている（市平城京第485次調査）。この調査地は、条坊復原では一条南大路が想定されている場所にあたる。しかし、奈良時代の上坑を検出したものの、条坊遺構は検出できず、一条南大路は条坊計画線より南

に施工されていた可能性があるという所見を得ている。

以上のように、本調査地周辺の調査では、条坊施行に関する成果が蓄積されてきており、本調査でも九坪内の様相を把握すること併せて、条坊遺構の検出を主目的に調査を行った。

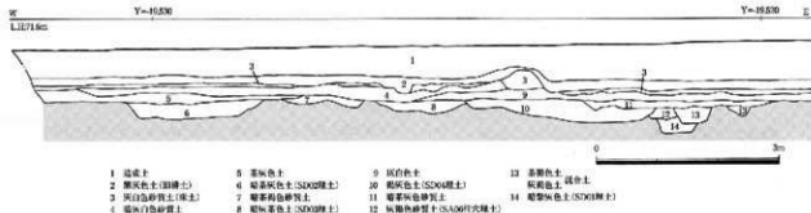
発掘区の基本的な層序は、造成土、黒灰色土（旧耕土）、灰白色砂質土（床土）、暗灰白色砂質土、茶灰色土と続き、現地表下0.9～1.1mで灰褐色砂質土の地山にいたる。地山は西から東に向かって下り勾配である。遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は、70.2～70.4mである。

II. 検出遺構

検出した遺構は、古墳時代以前の溝、奈良時代の西二坊坊間西小路路面と両側溝、掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土坑、鎌倉から室町時代の柱穴、土坑である。柱穴を多く検出したが、建物としてまとまらないものが多い。以下、主な遺構について概述する。

古墳時代以前の遺構 S D01は古墳時代以前の斜行溝である。幅0.2～0.3m、深さ0.3mで、溝の断面の形状は逆台形状である。遺物が出土しなかったので時期は特定できないが、奈良時代の遺構との重複関係や周辺の調査例からみて弥生時代後期から古墳時代の溝と思われる。

奈良時代の遺構 条坊に関わる遺構としては、S D02～S D04がある。各々、幅1.0～1.9m、深さは0.1～0.2mである。S D02・03の南半部は水田耕作時の地下げにより削平されている。S D03とS D04は遺構の重複関係はS D03と04は層位からS D03が古く、S D04が新しいが、



発掘区北壁堆積土層図 1/80

SD02とSD03、SD02とSD04の出土遺物を比べても、いずれの溝からも奈良時代中頃から後半と思われる土器が出上しているが、出土量が少ないと等もあり、明確な時期差についてはよくわからない。後述するが、SD02が西小路西側溝、SD04が東側溝で、この間が西小路路面SF05になると考えられる。SA06は南北方向の堀である。南北5間分を検出したが、北・南とも発掘区外へ続く。重複関係からSD04より古い。柱間は2.0m等間である。宅地の西端を限る南北堀と思われる。SB07は東西4間、南北3間以上の掘立柱建物である。発掘区外南へ続く。柱間は東西方向がL8~2.0m、南北方向が2.1m等間である。SB08は掘立柱建物の北側柱列と思われる。柱間は3.0m等間である。SB09は東西2間以上、南北3間以上の掘立柱建物である。柱間は南北がL8~2.0m、東西が1.8mである。SK10は東西1.0m、南北1.4mの不整円形の土坑である。深さは0.2mである。埋土からは、後述する奈良時代中頃の土器が出上った。

これらの遺構の他に、鎌倉時代から室町時代のものと考えられる遺物を含む柱穴も検出しているが、建物としてはまとまらない。

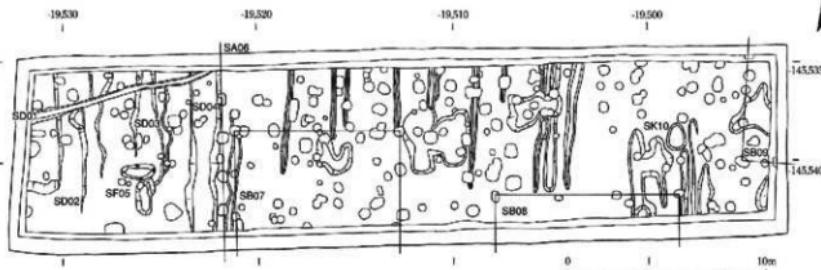
III. 出土遺物

遺物は出土整理箱にして37箱分出土している。ここではSK10から出土した土器群について概述する。

土師器には、杯A(2~4)、杯C(5~8)、皿A、杯(皿)蓋(1)、碗C、鉢(9)、壺(10)がある。須恵器には杯A(11・12)、杯B(13)、皿A、皿C、杯(皿)蓋、壺、壺がある。製塙土器も少量出土している。

土師器は、杯(皿)蓋片が数点出土しているが、いずれも外面をヘラミガキしている。杯A、杯Cの大半のものは内面に1段の斜放射状暗文もしくは連弧状暗文+1段の斜放射状暗文がみられる。底部内面にらせん暗文が施されているものもある。外面は全体をヘラミガキするものと底部に指頭圧痕をのこし、口縁部をヨコナデするものがみられる。4は底部外面をヘラケヅリしている。杯Aの口径は2と3が17.6~17.9cm、4が20.5cmで、口径が分化している。杯Cは口径が17.8~18.4cmで、深さが3.5~3.7cmである。鉢は口径18.2cm、深さ6.5cmである。壺は体部外面をハケメ、肩部から口縁部をハケメで調整した後ヨコナデしている。

須恵器杯Aは、11が口径12.1cmで深さが5.3cm、12が口径17.4cm、深さが3.9cmである。口径と器高の深浅による分化があるように思われる。11は底部外面がクロコケ



第503次調査 遺構平面図 1/250



第503次調査 発掘区全景（東から）



溝 SD02・03・04（北から）



SK 10 出土土器 1/4

ズリ、12がナデ調整である。杯Bは口径21.4cm、器高7.6cmである。底部外面の調整はヘラキリの後ナデを加えている。

これらの土器は形態や法量、調整手法からみて、奈良時代中頃の土器群と思われる。

IV.まとめ

最後に条坊造構についてふれておきたい。西二坊間西小路は、西隆寺跡の発掘調査の際に金堂と重複して検出された。西小路は、遺構の重複関係から金堂が建立される以前に施工されていたが、推定条坊計画線（西隆寺の伽藍中輪線）よりも約20尺西に施工されていることが判明した。その後の右京一条二坊十四坪の調査や西隆寺跡の調査でも同じように条坊遺構が計画線とは異なる位置で検出されている。これらの調査では、一条条間北小路、一条条間路といった東西方向の道路も計画心よりも北に施工されていることが報告されている。南北方向の道路では、西二坊間路は計画線通りに施工されていることが判明しているので、西二坊間路から東側で条坊施工にずれが生じていると考えられる。これらの条坊遺構が西隆寺造営以前の遺構であると想定されることから、平城京造営の時点での施工されていた可能性が考えられる。今回の調査では、一条南大路以南にもこの条坊のずれが及んでいるのかが問題になると思われた。

西隆寺第306次調査で検出された西二坊間西小路路面心の座標値は $X = -145.127.0$ のとき、 $Y = -19.529.3$ で、小路の路面幅は3.8~4.8m、側溝心間距離は約7mである。この路面心を本調査にあてはめると、計算値は

$Y = -19.526.94$ となる。仮に本調査で検出した SD02 を西側溝、SD04を東側溝と考えると、道路心の実測値は $Y = -19.526.1$ であり、道路計画心から約0.8m 東にずれているが、路面幅が約5m、側溝心間距離が約7mで、西隆寺跡で検出された遺構と同程度の規模となり、本調査のこれらの遺構が小路とその両側溝である蓋然性が高くなると思われる。ただし、この場合 SD03をどのような遺構と考えるかという問題がでてくる。このことについては発掘区外（西側）の状況も関わるので確定なことはわからないが、重複関係から SD03は SD04より古いので、道路と側溝が2時期あり、SD03は SD04より時期が古い東側溝と考え、SA06が宅地の西を限る塀とみることもできるし、SD03が上坑や溝なら、東西2坪以上の宅地であった時期がある可能性なども考えられる。また、先述したように、右京一条二坊では西二坊間西小路が推定される条坊計画線よりも西に施工されたことが報告されている。今回の調査で検出した SD02と SD04が小路側溝と考えられるのであれば、この道路は一条南大路以南でも条坊計画線よりも西に施工されていたことになる。これらの課題については、今後の周辺の調査でその様相が明らかとなるであろう。（池田裕英）

1)「西隆寺発掘調査報告」西隆寺調査委員会1976

「西隆寺発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所1993

「西隆寺跡発掘調査報告書」奈良市教育委員会2001

2)「平城京右京一条二坊「四坪」の調査」「奈良市埋蔵文化財調査

概要報告書 平成2年度」1991

15. 平城京跡（右京二条二坊十六坪）の調査 第504次

調査次数	HJ 第504次
工事内容	共同住宅建設
届出者名	東急不動産株式会社
調査地	奈良市西大寺国見町1丁目2137-85番地他

調査期間 平成15年10月15日～12月5日
 調査面積 450m²
 調査担当者 中島和彦



第504次調査 発掘区位置図 1/6,000

調査地は、平城京右京二条二坊十六坪の北東部にあたる。十六坪の発掘調査は3ヶ所（国第137次、国第151～22次、市HJ第116次）あり、いずれも多くの柱穴と井戸を検出している。さらに東側には市HJ第503次調査があり、十六・九坪境小路を検出している。今回の調査では十六坪内の様相を知る資料が得られると想定された。

発掘区内の層序は上から造成土、耕作土、灰色砂質土、茶褐色砂質土、明茶褐色砂質土と続き、地表下約12mで明青灰色シルトまたは明茶褐色砂の地山にいたる。地山上面の標高は70.3～70.4mで発掘区内北西部がやや高い。遺構は明茶褐色砂質土上面から掘り込まれるが、遺構検出は地山上面で行った。

検出遺構には掘立柱建物13棟、井戸6基、土坑、溝、素掘小溝などがある。これら遺構のほとんどは奈良・平安時代と鎌倉時代のものである。以下主なものを記す。

掘立柱建物 13棟を確認しているが、建物としてまとめられなかった柱穴も多く、総数はさらに増えることは確実である。平面規模、柱穴の大きさなどから中小規模の建物が多い。年代は奈良～鎌倉時代と考えられるが、その峻別は難しい。詳細を一覧表に記す。12世紀頃の土器が柱穴から出土する建物は6棟あり、他は8世紀頃の土器が少量出土する。個々の建物の組み合わせ等は不明だが、井戸や出土遺物のあり方から、8世紀後半を中心とした時期と、11世紀後半～13世紀後半頃の時期とに二分されると考えられる。なお検出した柱穴約270個の内、12世紀頃の土器が出土する柱穴は約60個で約2割ある。

井戸 奈良・平安時代のものが5基（SE14～17・25）、鎌倉時代のものが1基（SE34）ある。前者はさらに8世紀代のもの（SE14～17）と、11世紀後半のもの（SE25）とに分かれる。各井戸の詳細を表に記す。

SE25は井戸枠ではなく、大きく上下の2層に分かれる。上層からは12世紀中頃の土器が、下層からは11世紀末の土器が出土している。上層は検出面から約0.4mあり、井戸跡の堆積土層に土器を廃棄したものと考えられる。

SE34の瓦積みの井戸枠は、約1.2m分残っており、瓦は小口積みにする。井戸枠の基底部とその上約0.5mの所には円形に石を1段分積んでいるのが特徴的である。瓦は古代のものがほとんどで、さらに井戸枠の石の一部には凝灰岩の石材が使用されており、周辺の瓦葺きの基礎建物の廃材を使用したものと想定できる。

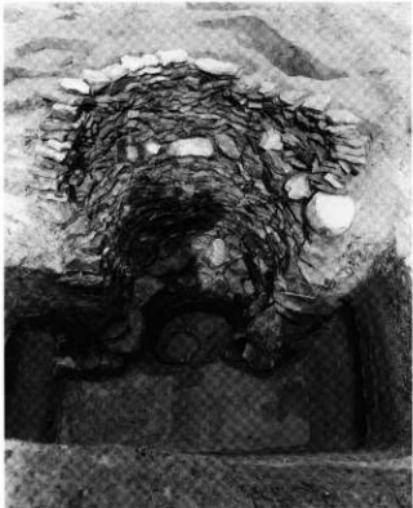
土坑 16基あり、8世紀後半代のもの（SK18～24）、12～13世紀のもの（SK26～33）、14～15世紀のもの

掘立柱建物一覧表

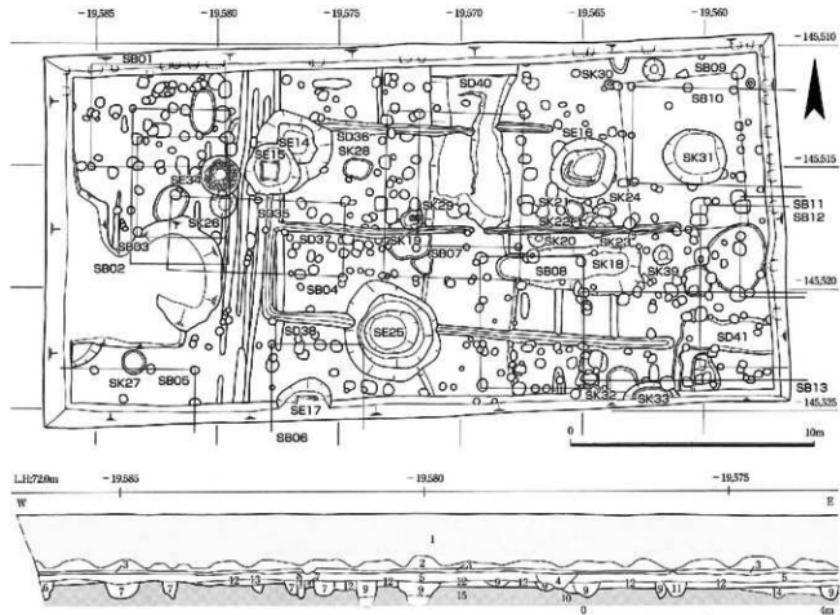
遺構番号	柱方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m	梁間全長 m	桁行柱間寸法 m	梁間柱間寸法 m	廻の出 m	備考	
								1等間	2等間
SB01	東西	3x2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間			
SB02	南北	3以上×2	4.0	4.2以上	2.1等間	2.0等間			
SB03	南北	3以上×2	3.6	4.2以上	2.1等間	1.8等間			
SB04	東西	4x2	7.2	3.0	1.8等間	1.5等間			
SB05	東西	3以上×2以上	3.6以上	1.5以上	1.8等間	1.5			12世紀以降
SB06	南北	2以上×2	1.8以上	1.8	1.9等間	1.8			12世紀以降
SB07	南北	4x3	6.9	5.7	1.8等間	2.1等間			西15、南15 西・南廻付、12世紀以降
SB08	南北	3x2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間			
SB09	南北	3x2	6.3	4.8	2.1等間	2.4等間			12世紀以降
SB10	東西	3以上×2	4.05以上	4.0	2.25以上	2.0等間			
SB11	東西？	1以上×2		4.2		2.1等間			
SB12	南北	3×2以上	6.75	1.8以上	2.25等間	1.8			12世紀以降
SB13	東西	4以上×2	3.75	3.6	2.25等間	1.8等間			12世紀以降



第504次調査 発掘区全景（西から）

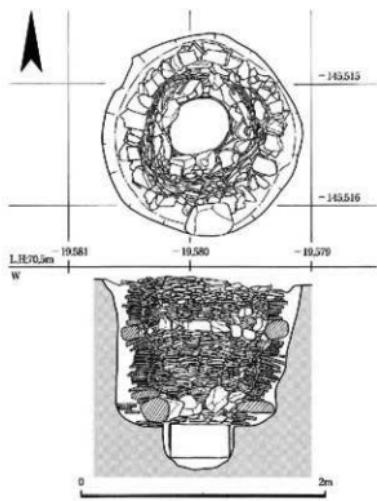


井戸 SE34 (南から)



- | | | | |
|------------|-----------|-------------|-------------|
| 1. 未成土 | 5. 黄褐色砂質土 | 9. 黄褐色砂質土 | 13. 黄褐色砂質土 |
| 2. 線作土 | 6. 黄褐色質土 | 10. 黄褐色砂 | 14. 黄褐色砂 |
| 3. 黄褐色砂質土 | 7. 明灰褐色土 | 11. 深灰褐色砂質土 | 15. 明灰褐色シルト |
| 4. 深灰褐色砂質土 | 8. 黄褐色土 | 12. 明灰褐色砂質土 | |

第504次調査 造構平面図 1/200・北壁土層図 1/80



井戸 SE34 平面・立面図 1/40

(SK39) がある。8世紀後半代のものは発掘区中央に比較的かたまっており、12～13世紀のものは発掘区全域に広がっている。後者の中には凝灰岩の石材が出土するもの (SK29・32) があり、SE34 での凝灰岩の石材出土を考えあわせると、この時期の基壇建物の廃材の利用が目立っている。

溝 発掘区の西半部には南北方向の素掘小溝群があり、この小溝群の1つ（SD35）に接続する東西方向の素掘小溝が3条（SD36～38）ある。SD36～38は約4m間隔で南北に平行し、深さ0.15～0.3mあり、他の素掘小溝より深い。13世紀後半の上器が出土しており、この頃に発掘区周辺が耕作地化されるものと考えられ

る。SD41は、発掘区南東隅のL字に曲がる溝で、旧水田の畦畔部分にあたり、水田の区画に関するものであろう。SD40は幅約3.5m、深さ約0.3mの南北方向の溝で、遺構の重複関係から最も新しい遺構である。奈良—鎌倉時代の上器が出土するが、時期を確定する遺物はない。

出土遺物には、上器類が遺物整理箱20箱、瓦類が60箱、凝灰岩の石材、石製品（砥石、効鍤車）、木製品（曲物、斎串、箸）、鉄製品（鉄釘、刀子？）、鐵滓、桃種がある。以下SE34出土遺物と各遺構出土の軒瓦を報告する。

SE34 からは遺物整理箱 1 箱の土器類、35 箱の瓦類、凝灰岩の石材、砥石 1 点、曲物、木製柄？が出土した。

土器類は、13世紀後半のものが破片で386点出土しており内訳を表に記す。土師器皿は、口径により大小の2種類に分けられ、大皿にはさらにならやや深手のもの(7)と、浅手のもの(8・9)がある。いずれも橙色系の胎土である。土師器羽釜には大和B型(18・19)とH型の他に、内傾する口縁部のもの(16・17)がある。後者は精華町の掠ノ木遺跡など京都府南部で多く出土しております、奈良市内の出土は初見である。口縁部と鋒の部分はヨコナデ調整し、体部はナデ調整か。出土点数は大和B型が27点、H型が4点、内傾する口縁部のものが6点である。瓦器椀は、内面に10~16回転の渦巻状の暗文がある。信楽窯の捏鉢15は片口があり、胎土は橙色の色調である。外面はロクロナデ調整で、底部付近にはリング状に溶着痕が巡り、これは焼台の痕跡であろうか。須恵器は東播系の捏鉢で、白磁は玉緑釉の口縁部である。

瓦類は、井戸戸戸使用のものがほとんどである。軒瓦は他出土の軒瓦とともに一覧表に記す。特徴として、SE34出土瓦は西隆寺と同範のものが多く、同型式の瓦は奈良時代の遺構からは出土せず、11世紀末以降のSE25から出土しはじめることが指摘出来よう。また新形式の軒平瓦(20)は、信濃国分寺出土品と同範である。

井戸一覧表

他に鬼瓦が1点、丸瓦が326点(83.76kg)、平瓦が1465点(382.4kg)、熨斗瓦が3点(2.62kg)、磚が10点(7.17kg)出土している。また「西」「十」の刻印のある平瓦が2点ある。

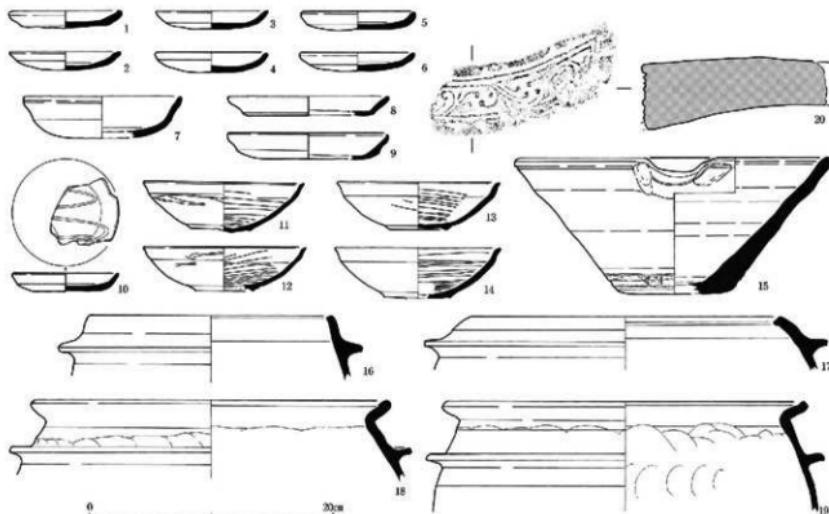
今回の発掘調査では、周辺の調査同様に多数の柱穴と土坑を検出した。また新たにこれらの中遺構群の中に11世紀末~13世紀後半のものがあることが判明した。素掘小溝のあり方から、調査地内では建物群は13世紀の後半頃には廃絶し耕地化がすすむようである。中世前半の遺構群は、調査地東に道路をはさんで隣接する市HJ503次調査や、南約150mにある市HJ460次調査でも確認されている。いずれも小柱穴が高密度であり今回の発掘区と同様である。これら中世の遺構の広がりと内容の把握が、調査地周辺の土地利用を考える上で重要な課題となろう。

(中島和彦)

井戸出土上器破片表

種類	器種	出土点数	出土比率
土師器	皿	133	34.5%
	羽釜	110	28.5%
	小計	243	63.0%
瓦器	楕	134	34.7%
	皿	2	0.5%
	小計	136	35.2%
須恵器	鉢	3	0.8%
国産陶器	信楽窯跡	3	0.8%
輸入陶磁器	白磁 楕	1	0.3%
合計		386	100.0%

	SE15	SE16	SE17	SE25	SE34	SD40	その他	合計
軒丸瓦	6125A				1			1
	6133Aa				1			1
	6133A			1				1
	6235C				1			1
	6236A				1			1
	6236D					1		1
	6281A		1					1
	6282Ba			1				1
	6301B					2		2
	6311A		1					1
	6313Aa		1					1
型式不明				1	1	1	2	3
合計		0	1	4	1	8	1	15
軒平瓦	6641F					1		1
	6643B			1	1			2
	6667A			1				1
	6681C				1			1
	6691A					1		1
	6694A					1		1
	6710A	1						1
	6710C	1						1
	6727A			1				1
	6730A				1			1
	6732Fa					1		1
	6732Q					1		1
	6739C					1		1
	6761A				1	14		15
	6764A					3		3
	6775A				1	2		3
新形式						1		1
型式不明				1	1			2
平安時代						1		1
合計		2	0	4	4	29	0	0
							0	39



出土土器 1/4

16. 平城京跡（左京四条六坊十五坪）・奈良町遺跡の調査 第505次

調査次数	H J 第505次	調査期間	平成15年11月4日～12月2日
事業名	椿井小学校建設事業	調柾面積	約132m ²
通知者名	奈良市長	調柾担当者	原田憲二郎
調柾地	奈良市椿井町25番地		



第505次調査 発掘区位置図 1/6,000

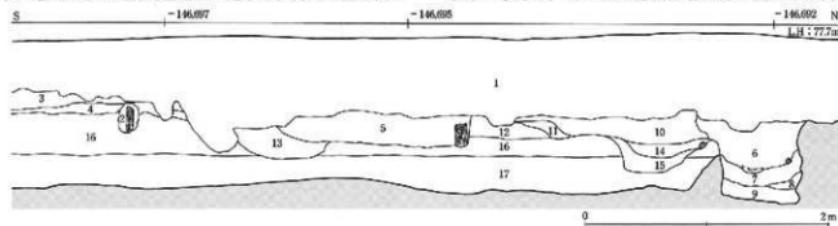
調柾地は平城京左京四条六坊十五坪の北辺中央部に位置し、奈良町遺跡内でもある。十五坪内では過去に、本調柾地南方約50mで市第232次調柾が、本調柾地西方約30mで市第482次調柾が行われており、奈良時代から江戸時代までの遺構が検出されている。特に市第482次調柾では42個以上の中世埋甕遺構が検出されている。調柾は十五坪内の様相解明を主な目的として、南北約16.5m、東西約8m、面積約132m²の発掘区を設定した。

発掘区内の層序は、発掘区北部では造成土直下で黄褐色粘土の地山となる。発掘区中央部では造成土直下に黄褐色の整地土があり、まず、この上面で遺構を検出した。整地土下には河川埋土である灰色砂・灰色砂砾があり、地山である明黄褐色砂土に達する。河川埋土上面で

は奈良時代の遺構を検出した。地山の標高は概ね76.9mである。河川は東西約6.0m分、南北約7.5m分を検出した。この河川については、調柾地の西方約50mで行った1987年の市による試掘調柾でも確認しているが、この時は試掘坑全体が河川内に収まっており、幅は不明であった。今回北岸のみであるが確認できた。本調柾地の南方約50mで行われた市第232次調柾地には河川は無いので、南岸は市第232次調柾地以北に想定できる。河川の深さは、約0.4mと浅いが、これは岸に近い為で、調柾区南側ではさらに深くなることが考えられる。河川埋土からは、古墳時代の須恵器が出土した。

検出した遺構には溝、掘立柱建物、土坑がある。以下、主なものについて記す。

S D01は発掘区中央部の整地土直下で検出した幅約1.7mの東西方向の溝である。長さ約8.0m分を確認した。溝底は西へ向って階段状に下がる。検出面からの深さは0.2～0.5mである。埋土は上から淡灰褐色粘土、淡灰色粘土の2層に分けることができる。埋土から8世紀の土師器・須恵器が出土した。なお、S D01北肩は河川の北岸とほぼ重なる。S X02は発掘区中央部で検出した整地土である。南北約6.5m、東西約6.0m分を確認した。厚さは概ね0.2mである。整地土内から、9世紀末から10世紀初頭にかけての黒色土器が出土した。S X02直下は河川堆積による地盤軟弱な砂層の為、整地を行ったものと考える。S B03は発掘区西北部で検出した南北

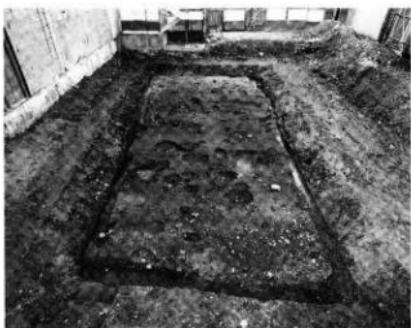


1 造成土	6 黄褐色粘土 (0.0m土多く含む、SK11埋土)	11 黄褐色砂 (中世埋土SX02)	16 灰色砂 (河川埋土)
2 青灰色粘土 (軸穴)	7 黄褐色粘土 (SK11埋土)	12 黄褐色砂 (中世埋土SX02)	17 灰色砂 (河川埋土)
3 緑色粘土	8 黄褐色砂 (地山明治中期埋土を多く含む、SK11埋土)	13 淡灰褐色粘土 (SK13埋土)	
4 緑色粘土砂質土	9 紫灰色粘土 (地山明治中期埋土を多く含む、SK11埋土)	14 淡灰褐色粘土 (SKD01埋土)	
5 紫灰色土 (SK12埋土)	10 黄褐色土 (中世埋土SX02)	15 淡灰褐色砂 (SKD01埋土)	

第505次調査 発掘区西壁上層図 1/40

1間（1.5m）以上、東西1間（2.1m）以上の東西棟掘立柱建物である。柱間は南北5尺、東西7尺である。北側の柱穴は、南側の東西方向に並ぶ柱穴に比して浅く小さい為、これを妻柱と考え東西棟掘立柱建物と判断した。柱穴埋土から13世紀前半の瓦器が出土した。S B04はS B03の南側に重複する位置で検出した南北2間（4.2m）、東西1間（2.4m）以上の東西棟掘立柱建物である。柱間は南北7尺（2.1m）等間、東西8尺である。柱穴埋土から、10世紀後半から11世紀初頭にかけての黒色土器が出土した。S B05は発掘区北東部で検出した南北2間（3.0m）、東西1間（2.1m）以上の東西棟掘立柱建物である。柱間は南北5尺（1.5m）等間、東西7尺である。柱穴埋土から、10世紀末から11世紀前半にかけての黒色土器が出土した。S B06は発掘区南西部で検出した南北2間（3.6m）、東西1間（2.1m）以上の東西棟掘立柱建物である。柱間は南北6尺（1.8m）、東西7尺である。柱穴埋土から、12世紀前半から中頃にかけての瓦器が出土した。S K07は発掘区北東隅で検出した土坑である。南北約1.3m分、東西約0.6m分を検出した。検出面からの深さは約0.3mである。埋土は上から暗灰色粘土、暗茶褐色粘土、暗灰色粘砂に分けることができる。埋土から12世紀の白磁碗が出土した。S K08・09・10は発掘区北東部で検出した平面形円形の土坑である。S K08は径約0.6m、S K09は径約1.0m、S K10は径約0.5mである。検出面からの深さはいずれも0.2m程度である。埋土はS K08が暗灰褐色砂質土、S K09・10が暗灰色砂質土である。遺構の重複関係からS K08はS K09より新しいことがわかる。S K08の埋土から13世紀前半の瓦器が、S K09の埋土からは10世紀末から11世紀前半にかけての黒色土器が、S K10の埋土から13世紀前半の瓦器がそれぞれ出土した。S K08・09・10の性格については、その形状が、いずれも擂鉢状を呈することから、埋糞遺構の可能性が考えられる。S K11は発掘区中央部西端で検出した土坑である。南北約0.8m、東西約0.5m分を検出した。検出面からの深さは約0.7mである。埋土は上から暗灰色粘土、暗灰褐色粘土、黄褐色砂礫、暗灰色粘土である。埋土から12世紀前半の瓦器が出土した。S K12は発掘区南部西端で検出した土坑である。南北約1.5m、東西約0.4m分を検出した。検出面からの深さは約0.3mである。埋土は暗灰色土である。埋土から13世紀の瓦器が出土した。S K13はS K12の南側で検出した土坑である。南北約0.7m、東西約0.8m分を検出した。検出面からの深さは約0.3mである。埋土は淡灰色土である。埋土から12世紀の土師器が出土した。

（原田憲二郎）



第505次調査 発掘区全景（南から）



第505次調査 遺構平面図 1/100

17. 平城京跡（右京三条四坊十四坪）の調査 第507次

調査次数	HJ第507次	調査期間	平成15年11月25日～12月11日
工事内容	共同住宅建設	調査面積	150m ²
届出者名	個人	調査担当者	武田和哉
調査地	奈良市宝来四丁目968-1、975-6		



第507次調査 発掘区位図 1/6000

調査地は、平城京の条坊復原では右京三条四坊十四坪の北東隅付近に該当しており、調査地の敷地の中央から東側にかけては、西四坊間西小路が想定されている。調査地の東隣では過去に調査例（県1997年度）があり、奈良時代の掘立柱建物や土器埋納坑、溝等が検出されている。今回の調査では、敷地内に想定されている西四坊間西小路に関連する遺構の検出を目的として、約150m²の発掘区を設定した。

発掘区内は、ほぼ中央に南北方向の水田畔があり、それより西側は水田面が約0.4m高くなっていた。基本層序は、上から順に、造成土（0.6～1.0m）、黒灰色粘土（=旧耕作土・0.2～0.3m）、暗灰色土（=旧底土・約0.1m）と続き、これより下層は、水田畔の西側と東側では様相が異なる。西側は暗灰色土（約0.1m）、暗茶灰色粘質土（約0.3m）、茶褐色粘土（約1.0m）と続いて、地表下約1.3～1.4mで黄灰色粘土または粘砂の地山層へと至る。

一方東側では、暗黃灰色粘質土（約0.05m）の堆積があつて、その下でまた地形の変化がみられる。発掘区東半部のうち中央寄りの部分では、暗黃灰色粘質土の下層で地山に到達する。それに対して、発掘区の約四分の一程度の面積にあたる東端部においては、さらに暗黃灰色土（約0.1m）と暗茶灰色土（約0.1m）の堆積があつて、最終的には地表面下約1.5mで地山へと至る。

地山上面の標高は、発掘区の西半分および東半部の中

央寄りの部分では、概ね80.3mであるのに対し、残りの東端部では80.1mである。

検出した主要な遺構は、奈良時代条坊側溝1条、溝3条、掘立柱2条である。以下、その概要について記す。

S D01は、発掘区の東寄りの場所で検出した南北方向の溝である。幅は0.8～1.4m、深さは約0.2mで、発掘区内での溝底は概ね同じ高さであるが、周辺の地形から推測すると南から北へと流れていたものと推測される。埋土から奈良時代の土器や瓦の破片が出土した。位置的にみて、西三坊間西小路の西側溝と考えられる。溝心の国土座標値（旧VI系）は、X = -146.3400 Y = -20.5832である。

S D02～04は、いずれも東西方向の溝である。幅は0.3～0.4m、深さは0.3m程度と規模が似ており、しかも各溝間の距離はほぼ3mの等間隔であることから、何らかの目的によって計画的に掘られた溝である可能性があると考えられる。埋土からは、奈良時代の遺物が出土した。遺構の重複関係からみて、S D01よりも古い。

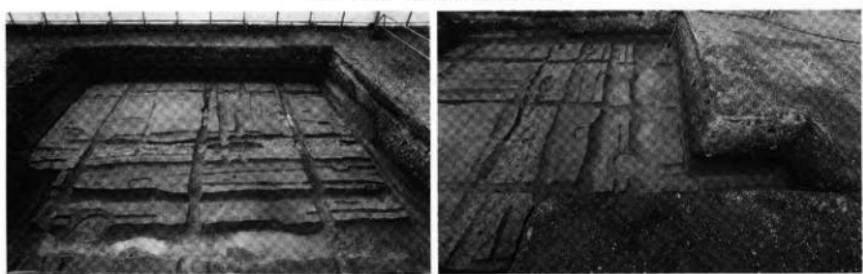
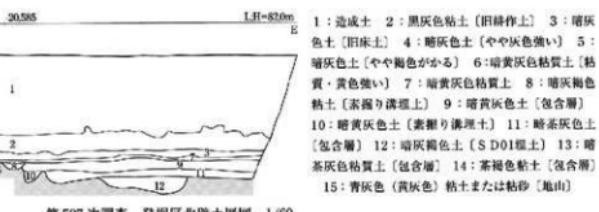
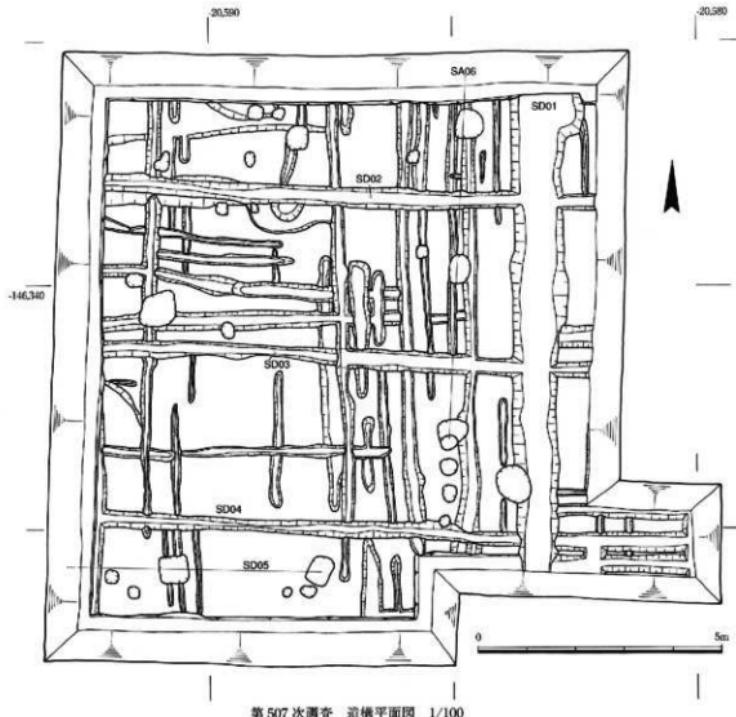
S A05は、発掘区の南辺付近で検出した掘立柱列である。柱間は、東西1間（約3.0m）分のみを検出した。ただし、発掘区外の西側および東側へと延びる可能性があり、建物の北東隅部分と想定することもできる。

S A06は、発掘区の東側、S D01の西側で検出した掘立柱列である。柱間は不等間で、南北2間（約6.3m）分を検出した。柱穴の検出状況からみて、南側へ延びる可能性は少ないとみられるが、北側へ延びる可能性は高いとみられる。

遺物は、遺物整理箱約5箱分が出土した。その大半を奈良時代の土器、瓦が占めている。

本調査で検出した西四坊間西小路の西側溝については、平城京の南北方向の条坊間連遺構で、これまでに発掘調査によって実際に検出・確認されている事例としては、最も西側での検出例となる。また、検出した遺構の位置と、周辺の条坊遺構の検出位置の関係を計算上検討すると、通常の造営寸法・単位尺であることが確認され、平城京右京北半部の条坊施工や寸法を考える上では重要な成果と言えよう。

（武田和哉）

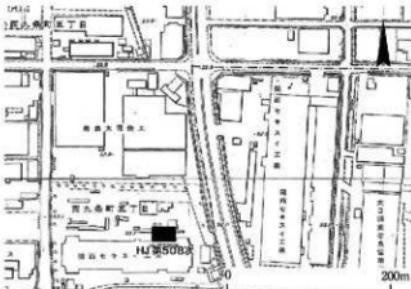


第 507 次調査 発掘区全景（東から）

発掘区東半・SD01（南から）

18. 平城京跡（左京九条一坊十二坪）の調査 第508次

調査次数	HJ 第508次	調査期間	平成15年11月26日～平成16年1月16日
工事内容	店舗新築	調査面積	239.5m ²
届出者名	関西セキスイ工業株式会社	調査担当者	三好美穂
調査地	奈良市西九条町五丁目3-2番地		



第508次調査 発掘区位置図 1/6,000

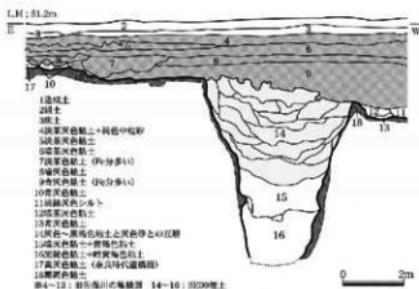
I. はじめに

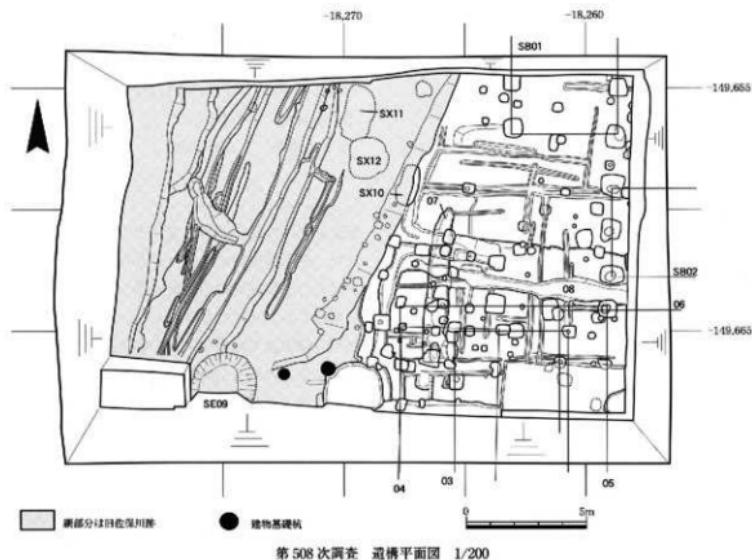
今回の工事は、既存の工場を壊し21,390m²の広大な敷地に、建物面積11,305m²の大規模な店舗を建設するというものである。調査地は、平城京の条坊復原によると、左京九条一坊五坪と十二坪の二坪分にもまたがっている。届出地の南半分は、昭和60年度に現存の工場を建設する際に、奈良県橿原考古学研究所により発掘調査が実施されている。発掘区の東半分は十二坪側にあたり、

奈良時代の大量の遺物を包括する数多くの遺構が検出された。発掘区西半分にあたる五坪内側では、幾筋も流れを替えた旧佐保川の痕跡を検出したが、奈良時代の遺構を確認することはできなかった。この調査成果から、今回の店舗建設予定地の大半が旧佐保川にあたり、届出地の東半分にのみ奈良時代の遺構が残存していることが予測された。そこで、奈良県・奈良市教育委員会とで協議し、奈良時代の遺構が良好に残っていると予測した十二坪内を重点的に調査することになった。

II. 検出遺構

層序 発掘区の基本層序は、約2.2～2.5mの造成土の下に耕土・床土（約0.2m）、土師器・須恵器を包含する茶灰色系粘土～青灰色粘土（0.4～1.4m）が堆積し、表土から2.8～3.2mで奈良時代の遺構面である黄灰色粘土（遺構面直上の標高：約50.7m）となり、その下に黒褐色粘土が続く。床土の下に堆積している茶灰色系の粘土は、旧佐保川が氾濫した際の堆積で、弥生土器、8世紀代の土師器・須恵器、15世紀代の土師器を包含している。旧佐保川の氾濫層は、周辺の調査例（市田第167次・第441次・第496次・第509次調査）においても





第508次調査 発掘区全景（東から）



第508次調査 発掘区全景（西から）

見つかっており、広範囲に渡って旧佐保川が氾濫したことが窺える。奈良時代の遺構面である黄灰色粘土は、8世紀代の土器片が含まれている。

検出した主な遺構には、奈良時代の掘立柱建物6棟、井戸1基、土器埋納坑2基、素掘り溝2条、中世素掘り溝、土坑がある。この他に旧佐保川跡を確認した。

掘立柱建物 発掘区北東部で2棟(SB01・02)、南端で4棟(SB03~06)検出した。SB01・02の柱堀形は一辺約0.7~0.8mある。掘形の深さは、SB01の隅柱が0.2m、妻柱が0.6m、SB02の隅柱は0.4m、妻柱が0.7mである。SB02は後述するSD08と重複しており、SD08よりも新しいことがわかる。発掘区の南東部で検出した建物4棟はそれぞれ重複しており、SB03→SB04→SB05



発掘区東半部（南から）



井戸 SE01 (南から)



井戸 SE01 (西から)



SX11 (西から)



SX11 土師器出土状態 (東から)

→ SB06と変遷していることがわかる。SB05・06は、SD07・08とも重複しており、それぞれSD07・08よりも新しい。いずれの柱穴からも8世紀代の土師器・須恵器小片は出土しているものの、詳細な時期は不明。

素掘り溝 南北方向の溝SD07と鍵の手状に曲がる溝SD08がある。SD07は、長さ6.4m、幅1.0m。検出面からの深さは0.2~0.3m。溝内には、上から暗灰色粘土、黒褐色粘土が堆積していた。重複関係からSD08よりも古いことがわかる。SD08は、東西10.0m分、南北6.4m分を検出した。東端と南端は、それぞれ発掘区外へ続く。溝の幅は一様ではなく、狭い箇所は0.4m、広い所では2.0mある。検出面からの深さは、約0.2m。溝内には、8世紀代の土師器・須恵器破片を包含する淡黄褐色粘砂が堆積していた。宅地内を区画する溝か。

井戸 旧佐保川と重複して検出した奈良時代の井戸SE09がある。井戸掘形は、東西2.3m、南北1.8m以上の隅丸方形で、断面形は掘り鉢状を呈している。検出面から約3.0mまで掘り下げたが、井戸底を検出することはできなかった。井戸枠は、抜き取られたよう残存していない。井戸内の埋土は大きく3層に大別できるが、粘土と砂で一举に埋められたようである。遺物は少なく、8世紀代と考えられる土師器・須恵器・瓦片が数点と井戸枠の一部(横棟)が出土しただけである。

土坑 発掘区中央の北側で3基検出した。遺構の上部は旧佐保川によってかなりの削平を受けている。SX10は、東西0.9m、南北1.7mの平面長方形の土器埋納土坑で、検出面からの深さは約0.7m。土坑の壁面はほぼ垂直で、底部は平坦に掘られている。底部に0.2m程の黒灰色粘土を敷き詰めた後、藁灰を敷き(厚さ0.5~1.0cm)8世紀前半~中頃の土師器杯A・C、皿Aを納めていた。さらに藁灰をこれらの土器に覆い(厚さ0.5~1.0cm)暗黄褐色粘土(厚さ30cm)で埋めている。土器は、土坑内の中央部から南端に集中して出土しており、正位置に置いたものや底を上に向けておいた物が遺物整理箱で3箱分出土した。



SX11 完掘状態 (西から)



SX12（東から）



旧河川検出状況（北から）

SX11は、SX12と重複して検出した。東西1.2m、南北2.2mの土器埋納土坑で検出面からの深さは約0.2m。SX10と同様に、壁面は垂直で底部平坦に掘られている。土坑内の北と南端に藁灰を敷いた後（厚さ約0.5cm）、その上に8世紀中頃の土師器杯A・C、皿Aを納めてから再び藁灰を被せ（厚さ0.5cm）、最後に暗褐色粘土（厚さ10cm）で埋めている。土器は、遺物整理箱で1箱分出土した。SX10同様、正位置で置かれているもの、伏せて置かれているもの等様々である。土師器の食器類に加えて、土師器壺の破片、須恵器壺の破片、瓦の破片が若干混じっていた。遺構の構築年代は、土器の特徴から見て、ほぼ同時期のものと考えられる。

この上器埋納土坑は、昭和60年度に奈良県橿原考古学研究所が本調査区の南側で実施した調査でも23基検出されている。土坑内には、土師器壺を主体とする土器が大量に埋納されていた点では若干内容が異なるが、藁灰を被せて埋められている点は共通している。奈良時代の佐保川は、もう少し西側を流れていることが昭和60年度の調査で判明しており、川辺に近い点から、水に関わる祭祀遺構であると推察される。

SK12は、東西1.6m、南北1.5mの平面楕円形の土坑で、検出面からの深さは約0.4mある。土坑内には、13世紀代の土師器皿、瓦器碗を少量包含する黒褐色粘土が堆積していた。

旧佐保川跡

耕土・床土の下がすぐに旧佐保川の氾濫土である淡茶灰色粘土～青灰色粘土が堆積しており、発掘区東端では0.6m、西端では1.2m以上もある。氾濫土は、奈良時代の遺構面を覆っており、埋土には15世紀代の土師器羽釜や瓦質土器鉢破片の他、弥生土器、8世紀代・9世紀代の土師器、須恵器、瓦、13世紀の瓦器片が遺物整理箱で4箱分包含していた。同様の氾濫土は、市HJ509次調査地でも検出しており、旧佐保川の氾濫がかなり広範囲に及んでいることがわかる。発掘区中央部では東肩



奈良時代の遺構上に堆積した旧河川氾濫土（北から）

部を検出した。東肩から西へ約0.9mの幅までは緩やかな勾配で、発掘区西端付近から急に深みを増している。今回の調査では、川底を確認することはできなかった。

旧佐保川は、周辺の発掘調査成果から、幾時期にも及んで川筋が変遷していることが明らかにされている。今回検出した東肩部は、出土遺物からみて室町時代以降のものであることが理解できる。東肩部では、杭穴を幾つか検出しており、当時の護岸施設に関わるものと考えられよう。

Ⅲまとめ

十二坪内は、旧佐保川により遺構が削平を受けてる箇所もあるが、今回の調査では奈良時代の建物や井戸・土坑を検出することができ、十二坪内の宅地の利用状況を知る手がかりを得ることができた。また、土器埋納遺構の検出は、十二坪内での祭祀形態のありかた（土器の種類、使用状態、埋納の方法）等を把握できる貴重な発見であったといえる。

さらに旧佐保川跡を検出したことにより、奈良時代は宅地として利用されていたが、室町時代以降には度重なる佐保川の氾濫により日常生活を営める状態ではなかったことも窺い知ることができた。

（三好美穂）

19. 平城京跡（左京九条東一坊坊間小路）の調査 第509次

調査次数	HJ 第509次	調査期間	平成15年12月1日～12月10日
工事内容	展示棟建設	調査面積	171m ²
届出者名	関西セキスイ工業株式会社	調査担当者	池田裕英
調査地	奈良市西九条町四丁目3-1番地		



第509次調査 発掘区位置図 1/6000

I.はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では、左京九条一坊十四坪にあたり、東一坊坊間小路路面と東側溝が想定される場所である。東一坊坊間東小路と東側溝は、過去の調査では左京六条一坊十・十五坪（市平城京第139次）¹⁾、左京七条一坊十六坪（奈良国立文化財研究所調査・平成6年度第252～第255次調査）²⁾、左京八条一坊十五坪（市平城京第380次）³⁾の調査で検出されている。

発掘区内の層序は、上から造成土、黒灰色土、暗灰綠色砂質土、暗灰黑色砂質土、茶橙色土と続き、現地表下約2mで、茶褐色土の地山にいたる。遺構はこの地山上

面で検出した。地山上面の標高は概ね51.0mである。

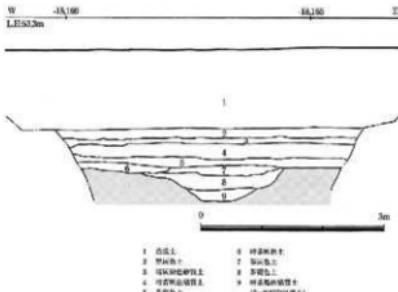
II.検出遺構

検出した遺構は、東一坊坊間東小路路面と東側溝である。路面は幅0.4m分のみ検出した。東側溝は、幅2.6～3.0mで、深さは0.6mである。溝心の座標値は、X=-149.585.0で、Y=-18.166.84である。埋土は上から茶灰色土、茶褐色土、暗茶褐色粘質土の3層に分けることができる。埋土から出土した土器は碎片が多く、時期を特定することが難しいが、土師器、須恵器の形態や調整手法等から奈良時代のうちに溝が埋まつたと推測される。（池田裕英）

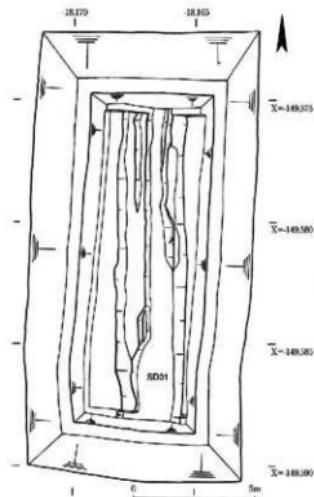
1) 奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度」昭和63年

2) 奈良国立文化財研究所「平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告書」平成9年

3) 奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成9年度第一回」平成10年



第509次調査 発掘区北壁土層図 1/80



第509次調査 遺構平面図 1/200

20. 平城京跡（左京四条四坊五坪）の調査 第510次

調査次数	HJ第510次	調査期間	平成16年1月6日～1月26日
工事内容	マンション建設	調査面積	234m ²
届出者名	フクダ不動産株式会社	調査担当者	武田和哉
調査地	奈良市三条大宮町212-2番地		



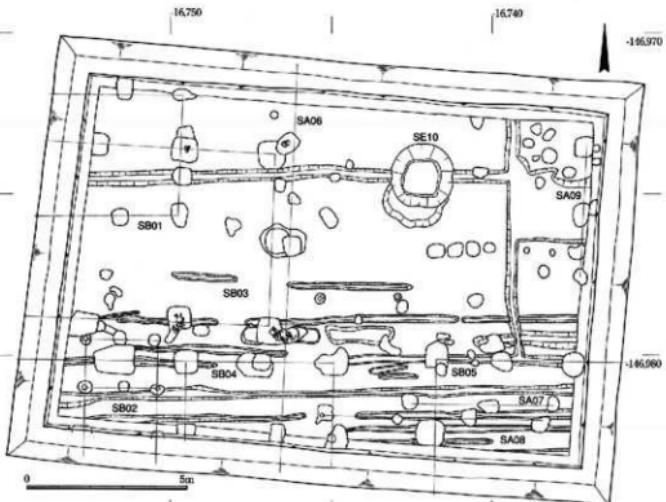
調査地は、平城京の条坊復原では左京四条四坊五坪の中央からやや北東方向に寄った場所に該当しており、現在は敷地の北側に菩提川が西流する。当坪内では過去の調査（市HJ第226次調査）で、弥生時代の溝や、奈良時代の掘立柱建物・柱列や井戸等を検出している。本調査に先行する試掘の結果、敷地の南側を中心に遺構の残存が判明したため、比較的遺構の残存状況の良い敷地南側を中心として234m²の発掘区を設定した。

発掘区内の基本層序は、上から順に、造成土（2.0～2.1m）、黒褐色粘土（=旧耕土・0.1～0.2m）、黒灰色土（=旧床土・0.1～0.2m）と続き、地表面下約2.4mで黄灰色粘土の地山層に至る。発掘区内の地山上面の標高は、概ね61.8mである。検出した主要な遺構は、奈良時代の掘立柱建物5棟、掘立柱列4条、井戸1基である。以下にその概要を記す。

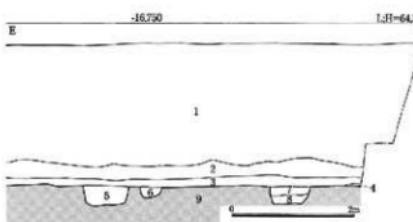
S B01は、発掘区の北西隅で検出した南北棟建物。発掘区内では、東西1間（1.8m）、南北3間（3.6m）分を検出した。建物の西側は発掘区外へと延びる。S B02は、発掘区の南西隅で検出した南北棟建物で、北庇が付く。発掘区内では、東西2間（2.4m）、南北2間（3.0m）分を検出した。建物の南側は発掘区外へと延びる。S B03は、発掘区の西側で検出した東西棟建物。発掘区内では、東西2間（6.0m）、南北2間（5.4m）分を検出し、比較的柱間の広い建物である。建物の西側は発掘区外へと延びる。遺構の重複関係から、前述のS B01・02よ

り新しい。S B04は、発掘区の南辺西寄りで検出した東西棟建物。発掘区内では、東西3間（7.2m）、南北1間（2.4m）分を検出した。建物の西側と南側は発掘区外へと延びる。遺構の重複関係からみて、前述のS B02より新しい。S B05は、発掘区の南東隅で検出した東西棟建物。発掘区内では、東西2間（4.2m）、南北1間（2.4m）分を検出した。建物の南側と東側は発掘区外へと延びる。S A06は、発掘区の中央やや西寄りで検出した南北方向の柱列。発掘区内では、3間（9.0m）分を検出した。柱列の北側と南側はそれぞれ発掘区外へと延びる可能性がある。遺構の重複関係からみて、前述のS B03より新しい。S A07は、発掘区の南東隅で検出した東西方向の柱列。発掘区内では、2間（4.8m）分を検出した。柱列の東側は発掘区外へと延びる可能性がある。また、建物の北側柱列となる可能性もある。S A08は、発掘区の南東隅で検出した東西方向の柱列。発掘区内では、3間（6.8m）分を検出した。柱列の東側は発掘区外へと延びる可能性がある。また、前述のS A07同様に、建物の北側柱列となる可能性もある。S A09は、発掘区の北東隅で検出した南北方向の柱列。発掘区内では、2間（4.2m）分を検出した。柱列の北側は発掘区外へと延びる可能性がある。また、建物の西側柱列となる可能性もある。S E10は、発掘区中央やや北東寄りの場所で検出した井戸。掘形は平面ほぼ円形を呈し、径約1.9m、検出面からの深さは約2.8mを測る。構築した形での井戸枠は確認できなかったが、埋土からは板材が数点見つかり、これらがかつての井戸枠の残滓である可能性が高い。ただし、構造等は不明である。8世紀代の土師器、須恵器、瓦とともに、9世紀初頭頃の土師器が出土した。このほか、木製品、漆紙文書が出土した。漆紙文書の詳細については、後段において報告する。

遺物は、遺物整理箱約21箱分が出土した。その大半は奈良～平安時代前期の土師器・須恵器、丸瓦、平瓦の破片が占める。調査の結果、奈良時代の建物や柱列を多く検出し、また平安時代初頭頃まで機能していたとみられる井戸を検出した。これらの遺構の重複関係等からみて2～3時期程度の変遷が想定される。（武田和哉）



第510次調査 遺構平面図 1/150



- 1: 造土 2: 黒褐色粘土〔旧耕土〕 3: 黒灰色土〔旧床上〕
 4: 褐茶褐色粘土〔柱穴埋土〕 5: 暗茶褐色土〔柱穴埋土〕
 6: 暗茶褐色粘土〔柱穴埋土〕 7: 暗茶褐色粘土〔柱穴埋土〕
 8: 褐茶褐色粘土〔柱穴埋土〕 9: 黄灰色粘土〔堆积〕

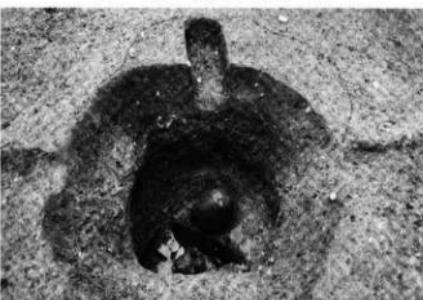
第510次調査 発掘区南壁土層断面図



第510次調査 発掘区全景（東から）



第510次調査 発掘区全景（北から）



井戸 SE01（北から）

平城京第510次出土漆紙文書の概要および平城京第128次出土漆紙文書の駄文の補訂

平城京第510次調査出土漆紙文書の概要 本調査で検出した井戸 S E10から出土した漆紙文書については、その後独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所史料調査室に対して、赤外線写真の撮影及び文字の転写を依頼した。また、転写作業においては同研究所調査員である古尾谷知浩氏（名古屋大学人文学院文学研究科助教授）が加わった。その結果は次頁の写真・転文の通りである。前述のように、今回の調査で検出した井戸 S E10は、枠内から9世紀初頭の土器が出土しており、この時期に埋没し機能を停止したものと考えられる。（武田和哉）

出土漆紙文書は、互いに接続しない30片からなるが、漆付着状態などから判断して本来は同一紙とみられる。うち13片の転文を掲出した。墨痕は一～三、八のオモテ面、二～三のウルシ面にあるが、ウルシ面の文字はオモテ面から左文字で観察できる。内容などから考えてウルシ面が一次利用面、オモテ面が二次利用面であろう。

ウルシ面については、細片が多く、字の大きさなど計測できないものが多いが、二・四・五では、字の大きさ0.9～1.1cm四方、行間1.4cmを測る。内容は統柄（男）、身分（奴・婢）、人名、年齢を列記しており、戸籍又は計帳に類する文書である。籍帳の実例の一つとしてだけでなく、奴婢の存在を示すものとして貴重である。

オモテ面については、一は字の大きさ0.6～0.8cm四方、行間1.3cm、八は字の大きさ1.3cm四方である。数字、人數がみえ、帳簿様の文書とみられるが、不詳。

（古尾谷知浩）

平城京第128次調査出土漆紙文書の駄文の補訂 同資料に関しては、既に「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和62年度」（以下、「S62概報」と称する）において報告されている。しかしながら、その後の赤外線写真撮影機器の性能の向上等の事情もあったことから、今般同資料についても前掲の第510次調査出土資料とともに奈良文化財研究所及び古尾谷氏に対して写真撮影と再調査を依頼したところ、新たに転写可能な字が確認された。当資料が出土した S E01は、枠内から奈良時代中～後半頃にかけての土器が出土している。第510次出土資料と同様に、内容的には戸籍または計帳に類別される資料であり、双方の資料ともに学術上重要であることを考慮して、当報告書紙面において併せて転文の補訂を報告する。詳細は以下の通りである。（武田和哉）

同資料は、S62概報では合計20片出土し、そのうち3片に墨痕が確認できる（そのうち一と二には別紙片が付着しているので、計5片）と報告されているが、再調

査の結果、総点数は63点、うち墨痕のあるもの14点であることがわかった。S62概報の一に付着したものを四、二に付着したものを五とし、続けて一四まで番号を付した。再調査の結果、一と二是本来接続（すなわち四と五も接続）することが確認できた。

一+二と四+五を含む漆紙塊は、全体として3紙からなり、ウルシ面を内側に二つ折りにして6枚重ねとなっている。最も外側の紙が四+五、2枚目が一+二である。細かい折れやしわもあるが、現状で長径28cm、短径14cmである。これは、全国的に見ても大型の部類に属し、パレットに用いられた杯や皿などに付着したものではなく、大型の曲物の蓋紙として用いられたものであろう。

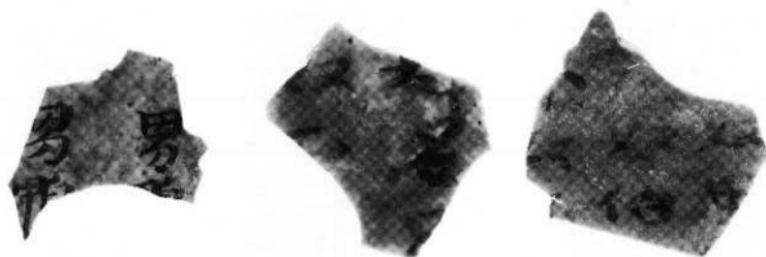
一+二は、オモテ面に9行分の墨痕が認められ（6行目は欠損または空白）、行間は2.7cm、字の大きさは本文1.3cm四方、細字0.8cm四方である。界線、印影、紙背文書は観察できない。今回の再調査で、5行目に年齢と身体的特徴の記載が細字双行で記されていることが確認できたことにより、計帳に類する帳簿であることが推定できるようになった。2行目と3行目の本質と思われる記載は、名前、年齢の下部にある異動などの注記であると思われる。7行日の人数字の部分は統計的な記載であろうか。9行目も本質記載の可能性があるが、字配りが他よりも高い位置にあり、性格は不詳。

四+五は、ウルシ面に3行の墨痕があり、行間は3.6cm、字の大きさは1.4cmである。オモテ面から鏡文字で観察せざるを得ないため、文字は不鮮明であるが、人名、人數を列記し、最後に合符を記したものであろう。

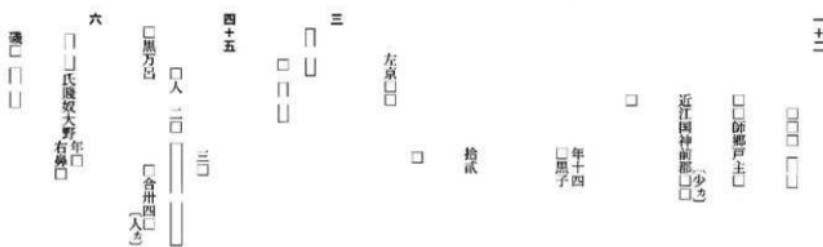
六は、再調査で初めて墨痕が確認されたものである。複雑に折り畳まれた状態で縦15.5cm、横7.1cmの断片で、大きさからして曲物の蓋として用いられたものであろう。墨痕はオモテ面に2行確認でき、字の大きさは本文1.3cm、細字0.6cmであるが、行間は紙のしわなどにより計測困難である。界線、印影、紙背文書などは確認できない。これも人名の下に年齢と身体的特徴を記しており、計帳に類する帳簿であるが、記されているのが「氏賤」（氏に属する庶民。氏宗の管理下にあり、遺産分割の対象外。戸令応分条に規定。）の「奴」であることが注目される。一次史料にみえる氏賤の実例として貴重。なお、一行目の「鼻」の下の字は門がまえの文字である。

三、七～一四は、小片のため解説を省略する。

第128次調査出土資料は、第510次調査出土資料とともに、古代の籍帳の実例として、また、奴婢のあり方を示す一次史料として、意義が大きい。（古尾谷知浩）



HJ 第510次調査出土漆紙文書赤外線写真（上段右より二・四・五、裏焼き）および 釈文



HJ 第128次調査出土漆紙文書赤外線写真（左、一・二・四・五）および积文

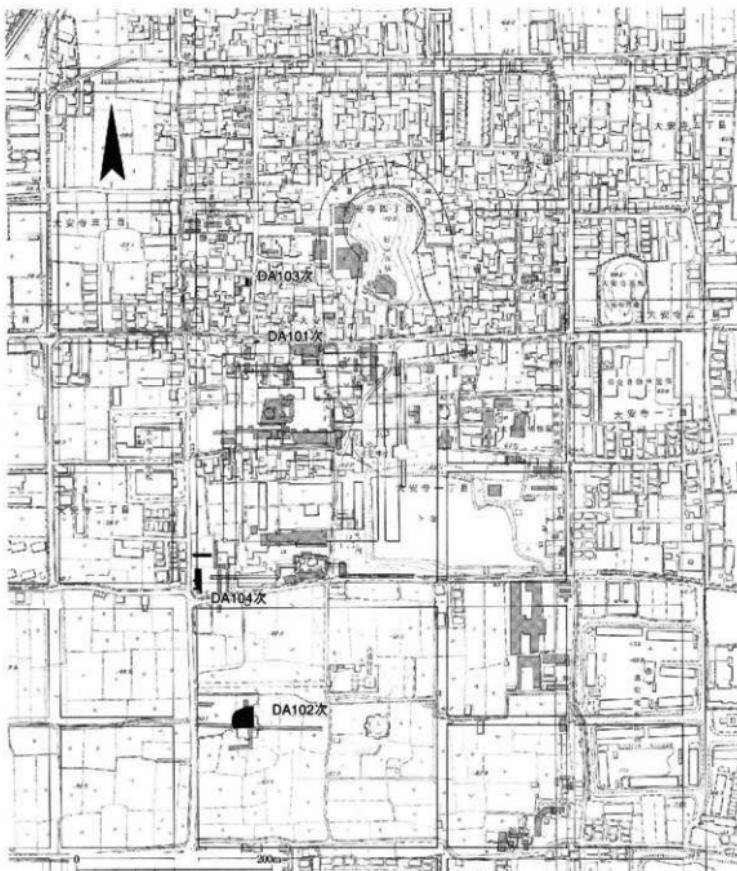
21. 史跡大安寺旧境内の調査 第101～第104次

史跡大安寺旧境内では、平成15年度に4件の発掘調査を実施した。第101・103次調査は、現状変更許可申請を実施した。

請に係る調査で、第102次調査は保存整備事業に、第104次調査は遺跡範囲確認調査に係る調査である。

平成15年度 史跡大安寺旧境内発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	申請者	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
史跡大安寺旧境内（北園跡）	DA101次	個人	倉の改築及び解のやり替え	大安寺二丁目1145番地の1	5/13～5/20	4.0ml	中島
史跡大安寺旧境内（西塔跡）	DA102次	奈良市長	史跡大安寺旧境内保存整備事業	東九条町1335 他	7/1～10/31	370.0mf	板浦
史跡大安寺旧境内（梵立并大乗院推定地）	DA103次	個人	個人住宅新築	大安寺四丁目10521 他	11/7～11/20	30.0ml	三好
史跡大安寺旧境内（南面・西面等地）	DA104次	奈良市教育委員会教育長	遺跡範囲確認	大安寺町1320 他	II16.1/14～216	188.0ml	中島



史跡大安寺旧境内発掘調査位置図 1/5,000

(1) 史跡大安寺旧境内(北面僧房)の調査 第101次調査

調査地は大安寺の北西中房の北側にある。天平19年(747年)の「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」には、北西中房の記述はないが、近年の発掘調査によりその存在が確認された。発掘調査成果によると北西中房は、基壇の幅約12.5mで、基壇外装は当初凝灰岩切石の壇上積で、後に瓦積みに作り直されている。さらに基壇から北に続く軒廊の基壇も2ヶ所で確認され、北西中房北側には未知の構造物が推定できよう。基壇上には梁行3間(約9m)の礎石建物が築かれる。また基壇の下には、北西中房に先行すると考えられる掘立柱建物が見つかっている。

発掘区は北西中房の基壇北端から約6mの所で、中房北側の状況を知る資料が得られるものと考えられた。

発掘区内の層序は上から表土、暗灰褐色土、暗茶褐色土、灰褐色土、淡茶褐色土で地表下約0.8mで地山の明黄橙色砂礫にいたる。地山面の標高は約61.3mである。地山の上に堆積する淡茶褐色土層からは、14世紀頃の土師器皿が出土しており、その埋没年代が知れる。

調査の結果、江戸時代以降の井戸(SE01)1基を検出したが、大安寺に関わる遺構はなかった。井戸SE01はその一部を検出したのみで、掘形は平面円形と考えられる。大半が発掘区外にあり、その規模、構造は不明である。深さ約0.3mまで掘削し、江戸時代の瓦が出土した。

出土遺物には遺物整理箱7箱の瓦類と1箱の土器類、鉄釘3点、凝灰岩片がある。殆どが表土と遺物包含層出土のものである。

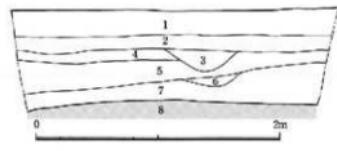
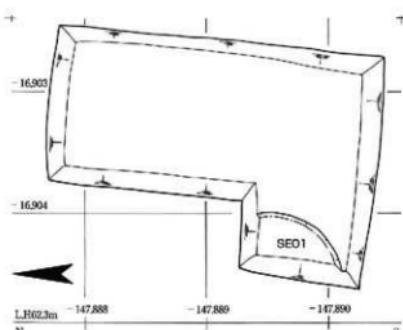
土器類は120点余りの土器片で、奈良・室町・江戸時代のものがあり、特に14世紀中頃～後半の遺物が多く見られる。

瓦は近世のものを除くと、丸瓦が114点(12955kg)、平瓦が494点(51930kg)、丸平瓦が70点(415kg)である。軒瓦は8点出土しており、いずれも表土と遺物包含層出土である。軒瓦の型式と内訳は、軒丸瓦では6138Cbが1点、6138caが1点、軒平瓦では6712Aが2点、鎌倉時代と考えられる剣頭紋軒平瓦が1点、江戸時代の桶紋軒平瓦が3点、欠損による型式不明が2点ある。剣頭紋軒平瓦は灰褐色土層から出土しており、大安寺から発掘調査で出土したのは、杉山瓦窯の4号窯灰原出土品につき2例目である。下向き剣頭紋の上部には珠紋を配し、上外区外縁に線鋸歯紋を配す。曲線頭と考えられ、頭部はヘラケズリで調整する。薬師寺、法隆寺、頤安寺に同范品があり、平安時代後半から鎌倉時代前半のものと考えられる。他に障1点、駿斗瓦3点がある。

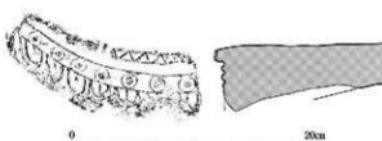
(中島和彦)



第101次調査 発掘区全景(東から)



第101次調査 遺構平面図及び東壁土層図 1/40



出土軒平瓦 1/4

(2) 史跡大安寺旧境内（西塔跡）の調査 第102次

I. はじめに

今回の調査も昨年度に引き続き、西塔地区の保存整備に係る調査として実施したものである。本年度は、現状土壇の状態から見て、最も遺構の残りがよいと推定された北西部4分の1強の範囲に、昨年度調査区と一部重複するかたちで発掘区を設定した。ただし、当初予定していた基壇西階段の全面検出は、作業量的に今回の調査では断念せざるを得ず、本年度の実質的な調査面積は370m²となっている。

II. 層序

昨年度に確認した堆積上は土壇全体を覆っているものと思われ、同様の層序が再確認できた。基壇上面の堆積層はほぼ腐葉土などの表土層のみであり、0.1m前後の厚さがある。

基壇外周には、その腐葉土以下、近世以降の遺物を含む層が0.4m前後堆積しているが、細かく見ると4~5層に分層できる。これは数度にわたって塔基壇が削平され外側に土が引きならされた結果であろう。土壇裾付近では中世の遺物を含む層も認められる。これらの層には塔に葺かれていたと考えられる瓦片も多く含まれるが、この地表下約0.5mまでの部分は一括して掘り下げた。

この下に瓦を大量に含む焼土層（上の瓦層）が堆積しており、基壇に近い最も厚い部分で0.7mほどある。この焼土層は塔の火災によるものであろうが、この層自体も引きならされた形跡が認められ、本来基壇近くに堆積していたものが開削によって外に広げられたものであろう。遺物から見ると13~14世紀のことと考えられる。したがって火災による崩落堆積が原状を留めているのは基壇裾のわずかな部分に限られる可能性が高い。また、基壇の周縁にはこの層を掘り込んで基壇外装の抜取り跡が溝状にめぐっている。

焼土層の下には、整地層と考えられる黄灰色砂質土の瓦がほとんど含まれない層が10cm前後堆積しており、

その下に大量の瓦が黄色粘質土で硬く固まった層（下の瓦層）が0.1~0.2m堆積している。この砂質土と粘質土はセットで整地層をなしていると考えられ、砂質土の上面は火災崩落前の地表と捉えられる。この上面の標高は59.8~60.0mであり、西にやや下る。さらに最下部に0.05m程度の明茶灰色砂が堆積し、塔築造時の基底面にいたる。この基底面を成す土層は今回も掘り下げていないが、部分観察によると明らかに人為的な層であり、掘り込み地盤の可能性も考えられる。基底面の標高は59.7mで全域ほぼ同じ高さである。

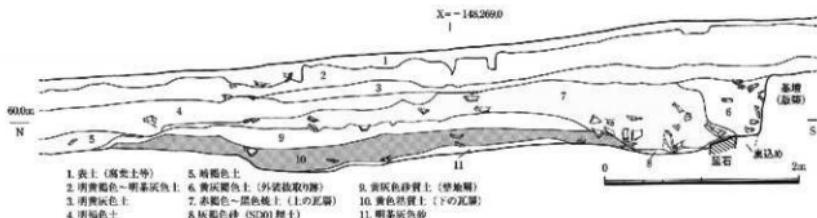
基本的には、間層を挟んだ上下2枚の瓦層が基壇周囲に一様に堆積しているという状態である。両者とも上より瓦のほうが多いといった層であり、特に上の瓦層は延石の前面約1m付近で溝状に落ち込んで厚く堆積しており、この部分に軒瓦が集中している。下の瓦層は瓦が固結した状態であるが、これまで出土した銅製品のほとんどが下の瓦層からの出土である。

III. 検出遺構

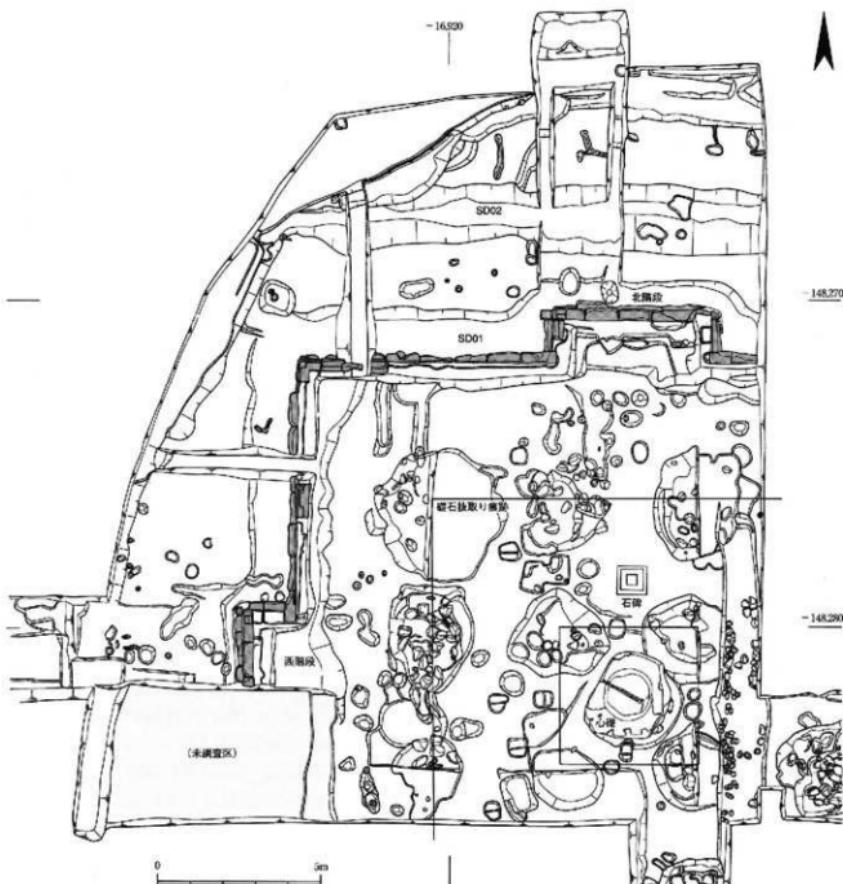
基壇 基壇外装については、周囲全体に凝灰岩の切石を検出した。残存しているのはほとんど延石のみであるが、階段部、角部、北側柱筋の延長上の東石部では地覆石や羽目石が残っていた。地覆石以上の切り石は塔が焼け崩れた後に抜取られており、幅1m前後、深さ約0.5mの溝状の抜取り跡が基壇全周をめぐっている。埋土からは12世紀の瓦器が出土している。

北西角から東にかけて3mほどは地覆石が残存しており、さらに羽目石が1枚残存していた。角の地覆石はその上に立つ東石との仕口が彫られているが、角の先端を内側に彫り残した特徴的な形となっている（写真参照）。また、北側柱筋の延長上に残る地覆石にも東石が嵌る仕口が彫られている。この地覆石によって、塔の北側柱筋の位置がかなり正確に認定できる。

基壇外装の切石の構成を残存部から概観すると、羽目



第102次調査 発掘区東壁北半基壇外周堆積土層図 1/50



第102次調査 遺構平面図 L/150

石は幅約75cm、厚さ約12cm、高さ約35cm以上、地覆石は長さ約110cm、幅約40cm、高さ約35cmで断面形が凸形を呈す。延石は若干バラつきがあるが、長さ1m前後、幅は最大のもので約40cm、厚さは推定15cmで、階段付近などでは全体の寸法を合わせるためかなり短いものもある。地覆石と延石との重なりは3cmほどで、延石の外縁は地覆石の外縁から30cm強外側に突出する状態となる。

北階段は全面を検出したが、東半は残存状態が悪い。規模については幅、・出とも前回推定した約4.8m(16尺)・約1.5m(5尺)になると考えられる。

基壇規模については今回角部を確認したことで、より実長に近づくことができたが、実際の角部の延石は風化

が激しく正確な設計当初の寸法を知るのは困難である。ただし、推定値(一辺70尺)どおりで不都合を生じる要素も無く、追認できたと考えてよいと思われる。

塔 基壇上面において、心礎を囲む四天柱の2箇所(北東・南西)、側柱の3箇所の礎石抜取り痕跡を新たに確認した。これらの形状・深さ・根石の残存状態については個々に異なるが、埋土は基本的に同じで、下部は基壇を掘削した土で埋め戻されており、上部は雨水でたまつたと思われる滯水の堆積が観察される。最も大きいものは北西角の側柱のもので、直径約4.0m、深さ約1.2mの平面円形の掘形であり、礫や瓦が大量に埋め込まれていた。この掘形は周囲の瓦礫を廃棄するために利用さ



第102次調査 発掘区全景（北西から）



北階段（東から）左側が基壇



基壇北西角部（西から）



金銅製品出土状態（北西から）左手前が瓦礫、右奥が水堀

れたようであり、遺物からみるとその時期は近世以降と考えられる。

また基壇上面で、柱穴と考えられる掘形をいくつか検出した。概ね一辺0.4m程度の平面隅丸方形で、深さ0.1～0.3mの掘形である。礎石抜取り痕跡と重複しているものについては、柱穴のほうが古い。塔の柱筋に沿って並んでいるものも認められ、塔建設時の足場穴の可能性が考えられるが、明確な規則性は判然としない。基壇全面での配置を確認した後に再検討する必要がある。

S D01 前回確認した延石前面部の溝状の落ち込みを再確認した。幅1.0m前後で基壇に沿って廻っているが、北西角で浅く外に向かって途切れるようになっている。雨落溝の可能性が高いが、疊敷きや凝灰岩の痕跡などが認められず、これが雨落溝になるかどうかは断定し難い。ただしこの底部には灰褐色の砂が薄く溜まっている、水の流れがあったようである。整地層の上面からは0.3m程度下がるが、基底面とは0.05m足らずの差みであり、これは掘られたものではなく、外側に整地土を盛ることによって形成された溝である可能性が高い。建立当初に雨落溝が存在したかどうかは不明である。

S D02 外周の北辺で幅約1.5m、深さ約0.2mの深い

溝状の差みを検出した。下の瓦層を完掘した状態で溝状に残ったものである。西側では同様のものは確認できなかった。前回の調査でも四方それぞれに溝を検出しているが、それぞれ規模、位置に若干の違いが認められたため、同一のものは認識していなかった。この溝の伸び方によっては基壇を囲む施設をも視野に入れた検討が必要となってくる。

その他に、基壇上面には後世に掘られた土坑がいくつある。中世以降のものと判断されるが目的は不明である。心礎を中心とした掘形は近世以降に心礎を抜き取ろうとした跡と考えられる。平成13年の調査前、ここが竹林であった時点で心礎の周りだけ礎や瓦が散乱していた状況を思い起こすと、先の北西角の抜取り痕跡と同様、この掘形も瓦礫の廃棄に利用されていたのであろう。この掘形によって心礎と根石の据え付け状態が観察でき、心礎が元位置を移動していないことが確認できた。

IV. 出土遺物

出土遺物については、現段階では未整理である。主なものとして瓦類、土器、金銅・銅製品、鉄製品、塑像片がある。出土総量は整理箱2275箱で、そのほとんどは瓦類である。

瓦類は前回と同じく、軒丸瓦は6138型式C b種と7251型式A種、軒平瓦は6712型式A種と同B種が多いようであり、この他、鬼瓦、隅木蓋瓦なども出土している。

土器は全体量が少ないが、その中で10世紀後半の土師器が多く、同時期の黒色土器A類も認められる。特に火災の崩落堆積がこれらの土器を覆っている状況が認められ、火災の時期をある程度絞ることができる。その他開削された層中から12~14世紀の瓦器が出土している。

金銅・銅製品は約40点出土しているが、小破片が多い。主なものとして風鐸1点、水煙1点がある。風鐸(2)は高さ約32cm、最大幅15.5cm、重さ5.4kgで前回出土したものとほぼ同規模であるが、重量は3kg以上軽く、断面形は明確な稜を持った菱形である。表面は鍍金され内部に鉄製の舌が残る。今回はこれに伴う風招は出土しなかった。水煙(1)は高さ50.0cm、最大幅34.0cm、厚さ2.0cm、重さ15.5kgの大型の破片である。炎が燃え立つような形状を呈し、表面に鍍金が残る。この破片は前回出土した破片と接合し、全高80cm以上の水煙となることが判明した。

塑像は小破片であり、どの部位かは不明である。

V.まとめ

今回の調査は、ある程度面的に遺構がおさえられたため、その様相が視覚的にもかなり明確となった。塔や基壇の規模については、基壇の一辺が約21m(70尺)、塔

の初重平面が3.9m~4.2m~3.9m(13尺~14尺~13尺)の方三間とした前回調査までの知見を追認することとなつたといえる。特に塔初重の規模は、北側柱筋の延長に東石を嵌める地覆石が残っていたことによって、柱筋は確定でき、残存状態は悪いものの北階段の全幅を検出したことで中の間寸法もほぼ確定できたといつてよいだろう。

基壇化粧の残存状態については良好とまでは言い難く、延石以外は部分的にしか確認できなかつたが、当初課題としていた基壇化粧の工法は、壇正積基壇であったことが確定したと言える。また延石は基壇全周に残存している可能性が高まり、今後の調査で、より正確なデータを得ることができると考えられる。

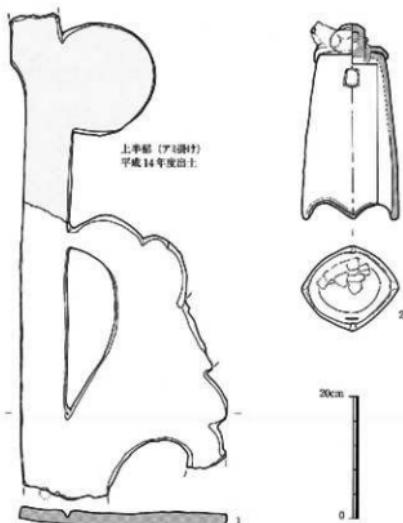
基壇外周に堆積した瓦については予想を上回る出土量があった。前回調査で出土していない型式の瓦も認められ、塔の造営に関する新たな手掛かりとなる可能性がある。銅製品についても、前回に引き続き風鐸・水煙が出土し、奈良時代寺院創建時の貴重な例がさらに追加されることとなつた。未発掘部分の堆積層中にも重要な遺物が残されている可能性が高く、今後の出土が期待される。

基壇周辺の回廊等、予想される施設については現段階では不明であるが、今回検出した溝S D02がそれに関連する可能性もあり、これまで復元されていた塔院とは異なる構造を考える必要性が出てくるかもしれない。

なお、本年度の調査でも掘り込み地業や版築の状態の確認は行っていない。現在基壇の基底面と考えている硬い整地層を含めて、基壇築造前の状態の確認も今後必要と思われる。

塔の変遷に関する知見としては、前回問題となつた2回におよぶ塔の被災について、今回の調査結果においても、下の瓦層が火災による崩落とする積極的な根拠は見出せなかつたため、最初の被災が火災以外の原因による可能性も考慮せざるを得ない。各層から出土する遺物について細かな時期決定ができるかどうかが一つの問題であるが、火災による崩落であろう上の瓦層が、記録に残る火災のどちらに対応するかが推定できれば、下の瓦層の形成が何を起因とするかを考察するうえでも一つの手がかりとなるだろう。

今回の調査によって、前回推定したいくつかの事項を追認することができ、部分的にはより詳細なデータを得ることもできた。遺物に関して重要な遺物が増加し、塔の様相を知る資料が追加された。また今後の調査方針にも一定の見通しを得ることができた。(松浦五輪美)



出土金銅製品 1/8

(3) 史跡大安寺旧境内（食堂并大衆院推定地）の調査 第103次

本調査地は、大安寺旧境内の伽藍復元図によると食堂并大衆院に推定されており、旧境内の北西隅に相当する箇所である。食堂并大衆院推定地内では、これまでに16件の発掘調査を実施しており、奈良時代の井戸、土坑、溝、平安時代の土坑、室町時代溝等を検出している。申請地の西隣で実施した市DA第56次調査では、掘立柱建物2棟（室町時代以前）、室町時代の東西方向の溝等を検出したことから、今回の申請地においても同様な遺構が残存している可能性が予測された。調査は、東西3m、南北10mの発掘区を設定し、平成15年11月7日から11月20日まで実施した。

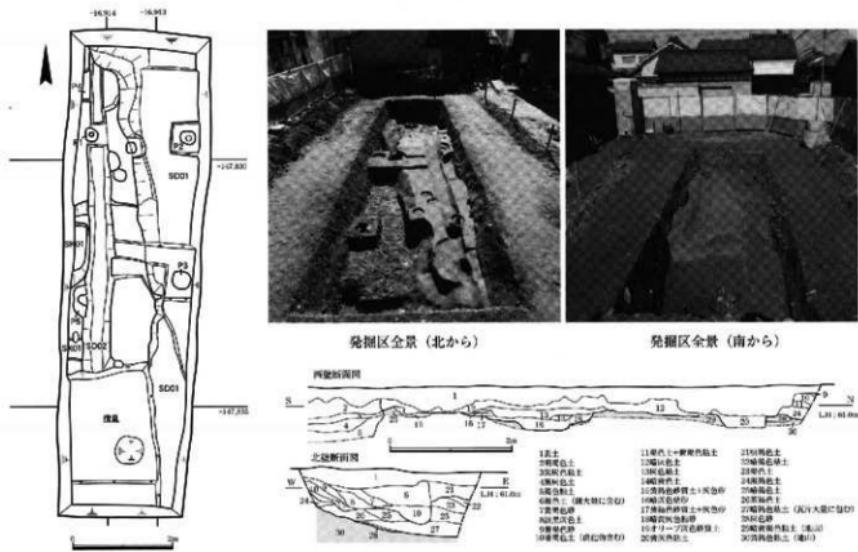
発掘区内の基本的な層序は、現在の宅地造成時の整地土（0.2~0.3m）の下に土器器の碎片や瓦片を含む暗灰色土（0.1~0.25m）があり、現地表下約0.3~0.4mで黄褐色粘土の地山（地山直上の標高：60.9~61.0m）に至る。検出した遺構には、南北溝1条、濠状遺構1条、小穴、土坑がある。遺構はすべて地山直上で検出した。

室町時代以前の遺構 柱穴P4・P5、土坑SK01とSX01がある。いずれも詳細の時期は不明だが、重複関係から後述するSD02よりも古いことがわかる。SK01は、南北1.3m、東西0.3m以上の土坑。浅い皿状に掘込まれ、検出面からの深さは0.2m。SX01は、南北幅0.4mの溝状

の遺構。遺構内には土師器と瓦の碎片を包含する黄褐色粘土と灰色砂が堆積していた。柱穴P4・P5は建物の柱穴になる可能性もある。

室町時代以降の遺構 SD01・SD02、柱穴P1~P3がある。SD01は、南北方向の濠状遺構。全様が不明なため詳細は不明だが、SD01の南北主軸が北で西へ振れる。最深部は検出面から約0.5m。埋土は概ね3層に大別できる。最下層には灰色砂、下層は大量の瓦片と15世紀代の土器器皿、瓦質土器鉢片を包含する暗褐色粘土、上層には褐色～茶褐色系の粘質土が堆積していた。上層には若干ではあるが、16世紀頃と考えられる土器器皿、瓦質土器片が含まれていた。SD02は、埋土から8世紀代の土器器皿、須恵器片・平瓦・丸瓦、12世紀末～13世紀代の瓦器、17世紀代の土器器皿が出土。柱穴P1とP2には柱根が残存。堀形埋土から近世の瓦が出土。

今回の調査では、奈良時代の遺構と判断できるものはなかったが、室町時代以降の大安寺の様相を知るための成果を得ることができた。南北方向の濠状遺構は、これまでに食堂并大衆院推定地では検出例はなく、今回が初めての発見である。既院推定地で検出している南北方向の濠とはほぼ同時期につくられている可能性があり、調査成果の蓄積を待って検討していきたい。（三好美穂）



第103次調査 遺構平面図 1/100

第103次調査 発掘区西壁（上）・北壁（下）土層図 1/80

(4) 史跡大安寺旧境内（西面・南面築地）の調査 第104次

調査地は大安寺旧境内の主要伽藍の南西隅にあたり、西面築地と南面築地のコーナー部が想定される。調査地は畦をはさんで南北2筆に分かれており、北側に第1発掘区、南側に第2発掘区を設定した。第1発掘区は南北3m、東西20mで、東西に長く設定し、西面築地と東側の西小字房の基壇西側の状況の確認を目的とした。第2発掘区は南北20m、東西約6mで、西面築地と南面築地のコーナー部と、発掘区東側約30mの所の市DA第90次調査で検出した、東西方向の河川の確認を目的とした。

調査の結果、西面築地を検出し、南面築地が第12発掘区間にあることが判明した。この結果をうけ次年度に両発掘区間を調査し（市DA第106次調査）、南面築地を確認した。調査の詳細は市DA第106次調査報告時に行うこととし、今回は概要を記すのみとする。

第1発掘区 発掘区内の層序は、厚さ約0.2mの耕作土直下で遺構面になる。遺構面の標高は約59.4mで、発掘区内はおむね平坦である。遺構面は西側では淡茶灰色砂礫の地山であるが、発掘区中央より東側では厚さ0.1~0.3mの整地土が堆積している。整地土は主に灰色粘土などで焼土、炭を含む層もある。検出遺構には西面築地東側雨落溝、東西溝2条、土坑などがある。

西面築地東側雨落溝は幅約3.0m、深さ約0.3mで、西側の肩に人頭大的石を一段列べて護岸する。溝の西側には東西4m以上の空闊地があり、西面築地が推定される。築地は発掘区南側では途切れしており、その部分には東西方向の溝があり開渠になる可能性がある。奈良~平安時代前半の遺物が出土した。

発掘区東半部では、複数の土坑が東西約10mの範囲にわたり複雑に重複しており、多量の奈良~平安時代前半の土器と共に、鋳型、炉壁片等が出土した。性格は不

明である。

第2発掘区 発掘区内の層序は、東南部で上から耕作土、淡灰色砂質土、暗茶褐色砂質土、灰褐色土、灰色砂質土で、GL -0.5mで明黄橙色砂礫の地山となる。奈良~平安時代の遺構面は地山上面である。地山の標高は発掘区東側で58.9~59.0mで、西側がやや低く約58.8mとなる。第1トレンチとは0.5~0.6mの比高差がある。検出した遺構には、溝6条、土坑、中世素掘小溝2条、掘立柱建物1棟、河川1条などがある。

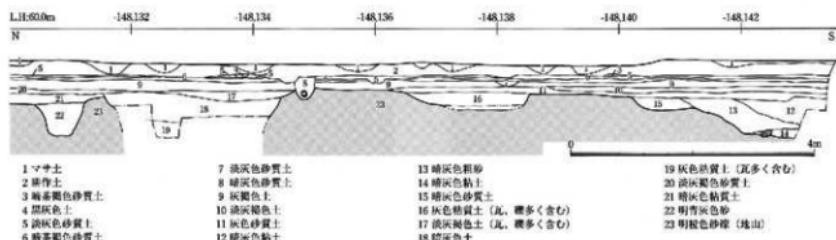
溝は奈良~平安時代のものが2条、平安時代後期のものが4条ある。前者はいずれも東西方向の溝で、南面築地の南側雨落溝と、六条大路北側溝の可能性がある溝である。後者は南北方向の溝2条と東西方向の溝2条で、それぞれ約1.5mの間を空けて平行してある。2対の東西溝と南北溝はそれぞれ発掘区南西部でL字に接続し、なんらかの区画施設の南西部にあたると考えられる。

平安時代後期の土坑は2基あり、うち1基は完掘していないが、井戸になる可能性がある。瓦が多く出土した。

掘立柱建物は、梁間4間、桁行2間以上の南北両面廂付き東西廂建物と考えられ、西側妻柱から1間分を検出し、さらに発掘区外東側につづく。重複関係から溝や土坑より新しい。建物主軸は北でやや西に振れ、後述する河川とほぼ平行しており同時期と考えられる。

河川は東西方向に流れおり、発掘区南端で検出した。北肩から1.9m分を確認し、深さは約0.7m以上ある。12世紀後半以降の土器、瓦類が出土したが、詳細な時期については不明である。市DA第90次調査で検出した河川と同一のものと考えられ、西でやや南に振れて西流する。現在調査地南側には水路があり、この河川を踏襲したものと考えられよう。

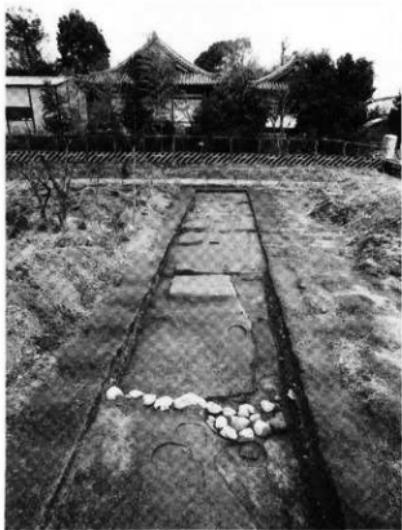
（中島和彦）



第104次調査 第2発掘区東壁土層図 1/80



第104次調査 発掘区全景（北西から）



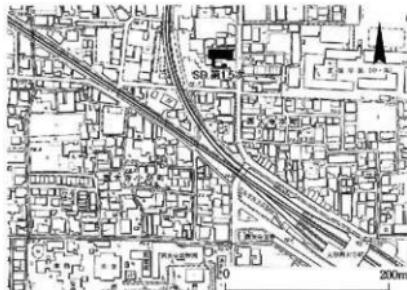
第104次調査 第1発掘区全景（西から）



第104次調査 第2発掘区全景（北から）

22. 平城京跡（右京一条三坊八坪）・西大寺旧境内（食堂院跡推定地）の調査 第15次

調査次数	SD第15次	調査期間	平成15年8月28日～10月20日
工事内容	マンション建設	調査面積	332m ²
届出者名	株式会社オーナーズプレーン	調査担当者	武田和哉 三好美穂 中島和彦
調査地	奈良市西大寺本町258-1, 260-7		



第15次調査 発掘区位置図 1/6,000

I. はじめに

調査地は、西大寺旧境内の伽藍復原では、食堂院跡推定地の北東隅に該当し、北隣には一条北大路が、また同じく敷地の東隣の道路付近には西三坊間東小路の存在が想定されている。調査地の南南西約50mの地点では、過去に調査例（市SD D12次調査）があり、巨大な礎石据え付け穴と思われる遺構を7基確認した。また調査地東方約100mの地点では、（財）元興寺文化財研究所が、右京一条三坊一坪（夷侯寮跡推定地）と西隆寺旧境内の調査を実施している。今回の調査では、当初300m²の発掘区を設定して調査に入り、後に届出者側と協議の上で発掘区を拡張し、最終的には332m²の発掘区を設定した。

II. 発掘区内の層相

発掘区の基本層序は、現地表面の下に厚さ0.3～0.4m程度の造成土があり、次いで淡茶褐色粘質土が約0.2m堆積し、その下に淡茶灰色粘細砂または淡灰褐色粘細砂層がある。この層には遺物が含まれることを確認しているが、小片のため詳細な年代を特定するには至らない。その下が地山となるが、発掘区内の場所により、青灰色（黄灰色）粘土、青灰色（黄灰色）粘砂等に分かれている。

なお、発掘区の一部には、造成土の下に、暗灰色土（旧耕作土）や茶褐色土（旧床土）が残存している部分がある。その部分では、耕作土・床土の堆積の厚さは約0.2mあり、その下に淡茶褐色土があり、その下は地山となる。発掘区北西隅では地表面から地山まで約0.4mを測る。

奈良時代の遺構面は淡茶灰色粘細砂または淡灰褐色粘細砂層の上で、平安～鎌倉時代にかけての遺構面は、淡茶褐色粘質土の直上である。奈良時代遺構面の標高は約73.7m、また平安～鎌倉時代遺構面は約73.9mである。

III. 検出遺構

今回の調査で検出した主要な遺構には、奈良時代の条坊側溝、平安時代の埋甕遺構、凝灰岩列、掘立柱建物、溝、不明遺構、および室町時代の溝と土坑などである。

S D01は、発掘区の東端で検出した南北方向の溝。両端とも発掘区外北・南へと延び、また東側の肩も発掘区外にあるので不明であるが、溝の最深部を検出しており、西岸から最深部までの距離は約5mを測る。埋土には奈良時代の土器・瓦が多く含まれるが、15世紀頃の瓦質土器火鉢も下層より出土した。遺構の様相や規模、さらには近隣で検出された条坊遺構との位置関係からみて、この溝は西三坊間東小路の西側溝の可能性がある。ただし、遺物の出土状況からみて、少なくとも14世紀後半頃までは機能していたことになる。平城京廃絶以降も排水路として機能していたとみられる条坊側溝の事例はいくつか存在するが、この溝が西大寺主要伽藍地区の東面を画する位置に該当する点を考慮すれば、浚渫を行いつつ機能し続けていた可能性はある。なお、最深部の国土土標値は、X = -144,981.5 Y = -19,790.6（旧第VI系）。

S D02は、発掘区の中央やや東よりで検出した南北方向の溝。S D01と並行して掘られており、両端とも発掘区外へ延びる。東肩の上部は現代の搅乱によって破壊されている。土層観察から、概ね3時期の堆積に大別される。すなわち、第Ⅰ期の規模は幅約4m、深さ約1mの規模であり、第Ⅱ期は第Ⅰ期の埋土が堆積した後に幅約4m、深さ約0.8mの規模で掘られ、第Ⅲ期は第Ⅱ期の埋土が堆積の後に掘られ、また遺構東側には積土が行われ、結果として東肩が狭まり幅員が減少して、幅約3.2m、深さ0.4mの規模となる。この積土は何かの閉塞施設の基礎である可能性がある。一方の西肩は、掘り込まれる層位は異なるものの、位置的には第Ⅰ～Ⅲ期を通じてほぼ同じ位置にある。第Ⅰ期埋土には8世紀頃の土器と瓦が、また第Ⅲ期埋土下層（暗灰色粘質土）には10